

道成寺現在蛇鱗

專一ならざれば遂る事あたはず、象を圓にし機を灰磐に貫いて、思發々々濟事足んぬと、王湫雍子を諫めたる、諭を爰に日の本や、神と君との道直に、國を傳へて四十九代、光仁天皇の統御ある奈良の都ぞ豊なれ。比は寶龜八つの年、主上御惱によつて、皇太子を立てらるべき宣命に任せ、御連枝の御位定め、參議中の衛の大將藤原の百川、己が儲の一の宮、他戸の皇子を帝位に即けんと、歡慮を恐れず公卿の評議も顧みず、只一人擢でて、儲位の一定を聞ずんば、宮殿を退かじと、日夜を分ぬ押奏聞、四十餘日が其間、またよきもせず階下に坐し、魏々儼然たる粧ひは、たぐひ稀なる道臣なり。既に其夜もほのくくと、明はなれたる雲井の御殿、御即位の評議とて、第一の宮他戸の皇子、第二の宮山の部の親王、左右の褥につき給へば、つゞいて左大辨小野の兼實、右大辨紀の廣純、群臣諸卿綺羅星の、袖を連ねて參列あり。御階の下には舊臣和氣の前司濱成、嫡子藏人武國、其外禁庭守護の武士、威儀を正して相詰る。兼實卿仰出さるとは、兼實「此度天皇御惱

によつて、御譲あるべき所、兩宮の御諍ひ一決せざるに、百川の押奏一理有りといへ共、是をもかたよりにて治定ならざれば、君宸襟を惱せ給ひ、彌御惱も治しがたし。去に依て前司濱成、汝は一たび官祿をさし上げ、今飛鳥の里に盤居すれ共、老人といひ始終を存ぜし者なれば、兼て思ふ仔細もあらん、いづれか寶祚をつがせ給ふべき御器量や有る、憚なく申上げよ」とありければ、濱成謹んで、濱成「恐れながら此儀は御評議に及ばず、兄宮と申せ共他戸の皇子は、更衣の御腹に宿り給へば御次男も同然、山の部の親王は御若年と申せ共、后腹にて自然と傳はる天尊、此君に御即位あらば、民萬歳を唱へ奉らん」と恐れも無けに言上有る。右大辨紀の廣純笏を上げ、廣純「ヤア鳴瀨がましき一言、たとへ御腹はともあれ一の宮を差置き、二の宮へ御位とは、最眞か但し頼れたか、山の部の親王は若年といひ、結構一遍の穩當、御即位とは思ひもよらず、皇太子は他戸の皇子、諍ひに及ばず」と、云解せば濱成、濱成「イヤそりや無體の御評議、皇子は一の宮と申せ共、御心たけぐしく、武勇を好ませ給へば君御心に叶はず、況や后腹を押退け、太子に立てる法や有る、御賢慮薄し」とやり込めれば、此方の百川くわつとせき上げ、百川「ヤア舌長なる批判、母方を改るは愚臣のなす所、既に唐土の舜王は、賤しき鼓腹の子なれ共、堯王の讓を受け、始皇は呂不韋が胤なれ共、莊襄王の位をつぐ、其外禹王高祖の賤陋擧て數へ難し。なんと是でも母方の評議有るや否

や」と、いはせも立たてず、濱成はななり「愚おろか々、唐土たうどは夷國えいこく、賤いやしき民たみを天位てんゐと仰おほく筋すぢ有あらうが、日本にっぽんは神國かみくに、天照神あまてらすかみの御末みすゑならで受うつぎ給たまふ理由いひわけなし。まつた後の御事みことは、天津あまつ兒屋根こやねの命みことより、代々よつと傳たはる皇みかど后ごう、俗くわうごうでいへば御本妻ごほんさい、上かみを學まなべば下々くだくだでも、本妻ほんさいの子こをさし置おき妾腹めかけはらにつがす法ははなし。其理ことわりを知らぬ汝なんぢにあらねど、忠臣ちゆうしん顔がほに座まをさらす、宮殿みやてんに突張つばるも合點あて々々。御邊ごへんが妻女さいによは元來もとより皇子みくらひに御位みくらひつがせたいも道理ことわり々々」と、いはせも立たてず居丈高ゐたけだかに成なり、百川ひゃくせん「ヤア案外あんぐわいなり濱成はななり、縁ゆかりに引ひかれて道みちを忘れ、大切たいせつなる御即位ごそくゐに最かたよたる評議へうぎをすべきか。今一言いまひとこというて見よ」と、面色めんしよく筋すぢをいら立たれば、濱成はななり「ホ、いはす共御邊ごへんが胸中きょうちゆう、眼前がんぜんに顯あらはれ見みせん」と詰つ寄りよりく評へふ中ちゆう、怒いかれる皇子みくらひの雷聲なにかみこ、皇子みくらひ「ヤア黙だまり居をらう老おいほれめ、儂おのれか磨まに位ゐをつがせぬ巧たくみ知るまいと思おもふか、誠まことは神代かみよより傳たはる三種みくさの寶たからの中ちゆう、十握じゆつかの寶劍ほうけん紛失ふんじつして、父帝ちちみかどの御物みもの思おもひ、夜よるの大殿おほてんに引籠ひきこらせ給たまふ故ゆゑ、密ひそかに汝なんぢと兼實かねじつが心こころを合せ、紀州きしゅう眞子まこの家いへに傳たはつたる、雷鳴丸らいめいまるといふ劍けんを十握じゆつかの代かほりに立たて、親王しんおうへ御即位ごそくゐあれと奏聞そうもんし、家來からい葛城かつらぎ權頭ごんかみに云い付け、眞子まこ新左衛門方しんざゑもんかたへ取りとりに遣つかはしたる事こと、自然しぜんと知しつたる皇子みくらひが賢德けんとく、忝かたじけなくも三さんの寶たからは智仁ちじん勇ゆうの三德さんとく、其理ことわりにそむく汝等なんぢらゆる、寶劍ほうけんは神上かみかみりし給たまふと思おもひしらぬか、なんとく」と三人さんにん一所いっしょに席せきを打ち、言い句くればさしもの濱成はななりはつと計はかり、返答へんたふ胸むねに

あぐみし體、嬌子藏人すよみ出で、藏人「雷鳴丸の劔と申すは、鯉口をはなるよ時、雷の音四方にひどき、魍魎鬼神の障怪も叶はず、惣て一家の災を防ぐ名劔と傳聞き、帝御惱平愈の御爲に、權頭を使として、紀州眞子新左衛門方へ先達てつかはしたり。十握の寶劔紛失とはゆよしき大事、皇子には又何として、委しく知召されうやらん、先此筋がいぶかしく、承らん」と話かくれば、親王を始め兼實卿、百官百司も顔見合せ、奇異の思をなしにけり。驚駭「ホ、其證據是に有り」としづくくと立出る皇子の傳、驚駭彈正國秀、あやしき死骸戸板にのせ、庭上に昇据させ、驚駭「寶藏の守護職神祇官大江の友高、寶劔を奪はれし越度によつて生害すと、委細の書置明白たり」と、一通をさし上れば人々披見ある内に、藏人立寄り死骸を改め、藏人「コレサ驚駭、此友高が腹の切様、刀の血の付き様迄、自身の業とは思はれず、胡亂な死骸を證據といふ、汝こそ詮議の手がかり、盜賊の筋、いへ聞かん」と反を打て立かよれば、驚駭「ヤア騒れそ藏人、御邊は現在此驚駭が兄なれば、兼て胸中はよつく知られん。胡亂な物を大切なる證據に立てうか、切腹の吟味より、自筆の書置慥な證據を云ほぐす、御邊の心底吞込まぬ」藏人「ア、いふなく、自筆やら贋物やら、友高が手跡ついに見ねば、死人に文言四も五もいらぬ、盜賊の筋聞う」驚駭「ヤア親濱成殿さへ批判なきをいらざる御邊が出しやばり立ち、盜賊の筋聞うとは、此驚駭を罪に落さん巧よな」藏人「云ふ

にや及ぶ、點合つた旁を一々に詮議する」さういふ吾主を「イヤ儕を」と兄弟柄に手をかけて、摺寄りく龍虎と争ふ詞戦ひ、皇子いらつて、皇子「ヤア鷲塚、汝が胸中くらしとは麿を疑ふ而當、兄弟とて容赦すな、そやつ急度糺明し、寶の有所詮議せよ、サアくなんと」と三方論議、既に危く見えければ、兼實卿雙方を押しづめ、兼實「三軍の災は猶豫に生ず、彼等が諍ひに皇子の詞を添らるゝは大人氣なし、藏人は親王の雜掌、鷲塚は皇子の傅、兄弟といへども互に家を隔つれば、疑ふは理りながら、神寶を奪取る事一方ならぬ大望、所詮汝等が力に及ばざる謀計なれば、兩人共に疑念はない、盜賊外に有るは治定、草を分つて詮議すべし」と、理非明白なる一言に、各かへす詞もなく、詮議一途に極まれば、親王もやゝ御心を痛ましめ給ひ、親王「父帝御惱平愈の御爲に、春日明神へ兼て祈願をこめ置きしが、かゝる凶事の起りし事も、夜の大殿に引籠らせ給ひ、朝政怠らせ給ふ故、彌神慮をすどしむるに若くはなし。鷹は是より參籠せん、急いで用意有るべし」と、御座を立せ給ひければ、皇子は心に笑の眉、玉だれ深く入り給ふ。百川廣純したり顔、互に目と目を見合せて寛々と退出す。臣臣たらぬ勢ひに、誰か恐れはあらがねの、土も草木も君が代に、従ひ靡く時津風、吹傳へたる 三重比なれや。紀の路より、都に近き櫟の本、往來しけき道筋も、黄昏時の跡絶を待ち、供をもつれず只獨、右大辨廣純が郎等岩倉伴内、主の威光を鼻に

かけ、嚴いかつにあゆむ向ふより、尾羽打はうちから枯せし浪人者、岩倉を見るよりも、編笠取あみがさて顔見合せ、浪人「エ
エ伴内殿かお久しや」伴内「コレハ」林專太夫殿、先御無事ごまじで「専太夫、貴公も堅固けんこで、珍重ちんちゆう々々、
見れば供廻りもなく輕々かるく數體すたい、何方どなたへ御座ごぞるぞ」と、問はれて伴内邊みたりを見まはし、伴内「サレバ
サレバ主人廣純公、貴殿きでんをお頼たのみなさると一大事ある故、只今貴宅きたくへ參る所、ちと急用なれば途中
ながら」と小聲になり、伴内「此度帝御惱みかどに付、紀州眞子新左衛門が家に傳はる、雷鳴丸らいめいまるといふ
名劍を、御枕ごまくらに置き給はど、御惱ごなや平愈あらんと濱成父子が計はかりを以て、家來葛城權頭かつらぎごんのかみといふ者を
眞子が元へ遣つかはし、寶劍を所持して、則ち今日が歸國きこくの日限、然るに他戸たごの皇子には、主人廣純公と
御心を合あされ、かねて御謀反ごぼはんの御企おんくはだてあれば、彼の名劍めいけんを何とぞ奪取うばとらん爲、先だつて味方あかたの廻
者ものを、權頭が供廻りに入置きたれば、此所を夜に入て通る手筈、貴殿に是を奪取うばとて給はれとの御
頼、首尾よく仕果しおほせられなば望もちに任せ取立んと、則ち皇子の御墨付おすみつきも持參せり」と、語る内より專
太夫、生れ付たる強惡無道かうあくむだう、打領うちうらういて、専太夫「コレハ」何事かと存ぞんじたれば、いと安き御頼、幸の
此松生まはえ、最早暮るとに間も有るまじ、爰こゝに忍びて權頭を討止め名劍を奪取うばとて御手に入れん、御心
安やすく思召おもしせ」と、事もなげに言ひければ、伴内「ホ、早速の領掌りやうじやう某も大慶たいけい、立歸つて此趣こゝろ申さん」と、
皇子よりの御墨付渡せば受取り、専太夫「御前はよろしく伴内殿頼存たのむる」伴内「何が扱あつかへ、追付おっつけ

吉左右招待べし」と互の挨拶、約束かたき岩倉内、館をさして立歸る。跡見送つて專太夫、年來の望叶へりと、件の一通戴きく懐中にしつかとをさめ、松影深く身を潛め、今やくと待居たる。既に其日も暮過ぎて、廿日餘の宵闇の、山路を照す對の挑灯、葛城權頭兼政、劔の箱を自身に携へ、數多の下部前後にしたがひ、夜を日について急ぎの道、紀の路も跡に遠ざかる、櫟の本にぞさしかよる。權頭下部に向ひ、權頭「サテく其方達が道積が悪い故、まちつとに成て夜に入た、大切の物を所持したれば、汝等も跡先に心を配れ」と、氣を付けられ、結句怖がる下部が臆病、下部「イ、エ何にも出や致しませぬがどうやら俄に寒氣が來た」と、跡先見廻し胴震ひ。此方に忍ぶ專太夫折こそ好しとつと出で、前に進し對の挑灯一二の刀に切落せば、「そりやこそ出たは」と下部共、皆散りぐに逃去りける。思ひがけなき權頭、「コハ狼藉者何奴」といふ聲導に專太夫、物をもいはず切付れば、かつぱと轉ぶを起しも立す、携へ持し劔の箱、とらんとすれば遣じと引く、機に箱を取落し、是はといふも眞暗がり、尋さがす權頭、油斷を窺ひ專太夫、刀振上げ切かくるを抜合してはつしと受止め、權頭「ヤア卑怯者、意趣あらば名乗かけ、なぜ尋常には討果さぬ、察する所盗賊な」と、刀を拂うて立上らんと、あせるも甲斐なき老人の、覺みかけて切付られ、あしらひ兼たる手負の受太刀、次第に弱る。鬪、數ヶ所の深手、エ、無念やといへ共こたへぬ相手

は無言、無殘の切捨、向ふへ飛くる挑灯の、影に驚き専太夫、劔の箱を小脇にかい込み道引違へ馳かへる。下郎が報知に源藏兼連十八歳の角前髪、振亂しかけ來り、腰挑灯の火影に透せば、朱に伏したる父が體、見るよりはつと狂氣のごとく、早事きれしか悲しやと、見廻す骸は深疵ながら、いまだ止の跡はなし、せめての頼今一度呼生て見んものと、用意の氣付を口におし込み、聲をはかりに、源藏「親人様、助でござる、源藏が參りし」と、呼聲泣く聲通じけん、手負は息出で目を開き、「源藏なるか」といふに嬉しく、源藏「コレくゝ氣を慥に持ち給へ」と、抱かよゆれば權頭、權頭「エ無念な源藏、死ぬる命は惜まぬが、大切なる劔を奪はれたはいやい」源藏「ヤ、ヤ、してそれは何者に」權頭「サア其名を知らぬが黄泉の障り」と、聞くより源藏「エ、しなしたり、是は正しく欺討、イデ追駈て討とめん」と、駈出す向ふに落ちたる一通、取上て押開き、火影に透しつらくと讀みも終らず、源藏「申し親人お悦びなされませ、敵の名が知れました」ヤアどうして」と起直る、父が目先へ一通さし付け、權頭「寶劔を奪取られよと、頼人の名はなけれど、宛名は林専太夫」アレ嬉しや」と只一聲、いふが此世の暇乞、笑ふが如く息たえたり。源藏は大聲上げ、源藏「エ、今一足早かりせば、斯くやみくゝとは討せじものを殘念な親人、去りながら、此一通が手に入るからは、やがて敵の首討て手向ませう」と、我を忘れて泣叫ぶ。件の一通尋ねんと引返す専太夫、

伺ひ寄つて源藏が、持たる一通引たくれば、無念の拳に握つめ、中より二つに引裂いたり。南無三寶と專太夫、するりと抜いて切かくるを、さしつたりと抜合せ、丁ど受たる手練の早業、機に消る腰挑灯、闇はあやなし叶はじと、有合ふ松に驅のほる。音を導に源藏が、振上る一念力、斜に切たる大木の、危き枝を飛下りて、飛ぶが如くに、三重驅り行く。神は人の敬ふによつて威を増せり、ましてやははいや高き、當今第一の宮山の部の親王、御父帝の御惱平愈の祈とて、春日の社に參籠有り。供奉は參議藤原の百川の嫡子少將安珍、守護の武士には和氣の前司濱成が嫡子藏人武國、非常を戒しめ威儀を正し、事嚴重に備へ居る。爰に藤原の百川は、他戸の皇子の頼によつて、密に親王を奪取らんと、工む底意は深編笠、鳥居間近く歩みくる。此方の松の一村より、百川暫し」と呼かけて、立出るは紀の廣純、ハツト驚き編笠取り近くさし寄り、百川「かねて申し談ぜし如く、兎角親王が在しくては、皇子御位に即き給ふ事叶はず、人知れず親王を奪取らんと存する所に、今日此社への參籠、則ち供奉は助安珍と聲の藏人兩人なれば、よもや某が奪取るといふ思ひ懸は候まじ、彼等が油斷を窺ひ忍び入らんと、斯のごとく身をやつし參る所、廣純公にも是迄の御出は、何故なるぞ」と尋ねれば、廣純「サレバく、兼て知らるゝ通り、兄道成通世の節より、娘錦の前を伯父の某に頼むと有る故、引取て養ひおく所に、貴殿には何とやら

嬉しいとて、構へて此方からそよるまいぞへ」錦の眞「さればいなう、今日爰で安珍様のお目にか
かるも明神様の引合せ、なんほ嬉しいとて其辛抱は爲いちやいの」と、戀の手筈の奥底も、杓
口同士の媚し。和氣の藏人武國は御前を退き爰かしこ、勞をはらす幕の外、苧藻は目早く、
苧藻「申し姫君、あれが藏人様とて安珍様のお妹躰、常々から大中好しぢやけな、何と彼方を頼
んで、逢して貰ふぢや御座りますまいか」錦の眞「ヲ、それく、幸ひのお方頼んで見や」と、差
圖に苧藻は頓て立寄り、苧藻「申し藏人様、ちとお頼申上たい事がござります、是へお供申たは、
右大辨廣純公の姪君錦の前様」藏人「ホウそりや聞くに及ばぬ知つてゐる、が先頼たいといふ筋
は」と、問れて姫は面はゆけに、「申出すも恥かしながら、御存の通り安珍様と自は勅諭の云號、
まだ祝言もせぬ先に、マア大膽な者ぢやと思召うが、急に遇はねばならぬ事有るゆゑ、伯父様の
目を忍び爰迄慕ひ参りしなり。どうぞお前のお世話にて、ちよつと遇はして貰ひたさ、初對面
から馴々しう思召すも氣の毒ながら、何とぞお頼申ます」と、思入つて宣へば、藏人「ヲ、それは
何より安い事、不義密通を取持つとは違ひ、勅諭の縁組なれば遇せるも安けれど、舅百川を始
め、廣純公の心入吞込まぬ所有り、先づ今日はお歸り」と、云宥むれば錦の前、錦の眞「互の爲を
思召ての御意見を、聞入ぬではなけれ共、怖い伯父御の目を忍び、爰迄來ながら是がまあ、どう

遇はずに去なれうぞ、お顔なり共見せてたべ、頼む拜む」と荊藻と俱に袂にすがり頼むにぞ、岩木を結ばぬ藏人は、無情も云放さず、四邊を見廻し打點き、藏人「夫程思はるゝを達て留るも無得心、どうぞ首尾して逢せませうが、構へて密に顔見る計り、隙どつて人が見たら爲にならぬ、合點か」と、詞を和氣の藏人は、御假屋さして入りにけり。姫君嬉しげに、錦の翦、藏人様が御座らさば、かうした首尾は出来まいもの、皆の衆も悦んでたも」殿共「ヲ、姫君様の嬉しい筈、今日はお蔭で私等も目の正月、ほんに藏人様もよい殿御、先きから見とれて居た。此上に又安珍様、見たらてつきり目が腫う。お氣に入りの荊藻殿、獨殘して私等は、神主方で待ちませう。サア皆おぢや」と氣を通し、打つれてこそ急行く。藏人が知らせによつて立出る少將安珍、まだ青衿の身なれ共、親王社參の供奉として、衣紋美しく著なしたる、花奢風流の立映、錦の前は飛立つ思、驅寄らんとし給ひしが、始めて交す言の葉に、身の上の憂さ辛さ、云ふも云はれずうちくと、さし俯向いて在します。安珍心を察し給ひ、安珍「珍らしや錦の前、是迄慕ひ來り給うた、志は嬉しけれ共、既に伯父廣純公も合點の上、皇子へさし上んと有るよし、云號あればとて、我をしたはるよは未練々々」錦の翦「いへく何ほう未練でも、伯父様の合點でも、皇子様のお心に隨がふ事はわしやいやく。是といふも父道成様が、此世に在さぬ故伯父様の爲たいがい、皇子様へ差上う

の、安珍様とは縁切るのと、うるさい事の有る條、たとへ天上の榮花を極るとて、お前を除けて外の殿御に添ふ氣はない」預言「夫なら勅詔を背いても大事ないかへ」安珍「ホ、勅詔を背いてなり共、當時皇子の御心を宥るは親王の御爲、天下の爲」錦の煎「スリヤどつ有つても」安珍「くどいくどい」錦の煎「ハア是非に及ぬ是迄」と、守刀をひらりと抜き、既に斯よと見えけるを、刈藻が緋止むる内、安珍はつと心付き、見捨て殺さば皇子の憤、彌募らん、隠し宥めて歸さんと、手を取て打笑み給ひ、安珍「ヲ、左程切なる志何しに見捨てん様はなし、二世迄も變らじ」と、打て變りし情の詞、姫はあまりの嬉しさに、夢ではないか夢ならば、覺めなくと現なく、互ひにひしと抱しめ、深き妹肯となり給ふ。木陰に忍ぶ父百川、走出て二人を引分け、物をも言はず指添ぬいて安珍の、烏帽子髪根元よりふつつと切る。「こは狼藉」と振返れば父百川、はつと驚く姫諸共左右へ投のけはつたと附付け、百川「ヤアいかに云號あれば逆、婚禮もせぬ先に忍び契るは不義徒、見さけ果たる兩人、勘勘當ぢや、嫁去つた」「エ、イ」と姫君醒醒の顔、安珍ちつ共わるびれず、安珍「エ、情ない親人、度々御諫め申せ共承引なく、非道の皇子に興し給ひ、剩勅詔を背いて錦の前を離縁し、某が髪を切つて勘當とは、道ならぬ御仕方」と、いふを打消し杉村より、廣純「ヲ左程勅詔を重んずる安珍が、最前錦の前が口説きし時、勅詔を背いても皇子の心に従へと

は、どの安珍が云うたな」と、聲をかけて立出るは、右大辨紀の廣純、「マア、伯父様そこにどうして」と、姫の恠り安珍も、仰天あれば苅藻がさし出で、苅藻「イヤ廣純様仰やんな、誰しも戀には意地の有る習ひ、ありや姫君様のお心を引見る爲の戲事」と、言はせも立てず右大辨、廣純「マア黙り居らう、姫に入性根する女郎め、隙くれた、立つてうせう。誰か有る、苅藻を親里へ追返せ」畏つたと下部共、「サア失せあがれ」と引立てれば、苅藻「申し姫君様、心を盡した今日の首尾、忠は不忠と事顯れ、お前も私も此難儀、只今お別れ申します。どうぞ伯父御様の御機嫌直し、安珍様といく久しうお添遊せ、お名残惜しや」と泣沈む。姫君も詮方なく、錦の眞「今迄は其方を力、是から誰と問談合、便なき身を推量しや」と、互にすがり歎くにぞ、廣純「ヤア家來共、何をまだまだ、ソレほつ立てよ、早く」とせり立られ、姫君は、錦の眞「おさらば、もう往きやるか、随分まで」御無事で」と、涙を残し立歸る。廣純重ねて、廣純「イヤ何百川、御邊父子が得心にて、縁さへ切るれば皇子の御望は叶ふといふもの、出家さする迄には及ばぬ事を」百川「コハ廣純公の仰共覺えず、縁計切りたればとて女は輪廻汚く、たとひ皇子へ差上給ふ共、愛着の念止むまじ。さすれば御心に逆らう故、只今姫の目の前にて、恥を討放し及思へ共、世の人口も氣の毒、殊に彼めは熊野權現の申子にて、あいだてなき母めが、三十三度の歩を運せられよと頼む、是幸ひ、非人

坊主となし、憂目をさするがせめての腹癒。名も安珍の文字をすぐに、安珍と名乗り、陪堂を乞うて世を渡れ」と、聞くより姫は泣出し、錦の眞イヤ〜、たとひお姿ほどの様に變る共、思切る事はならぬ〜。不義の科は同じ事、自も髮切て、供に修行の道連」と、縄り給ふを右大辨、取て突退け、廣純役にもたよぬ世迷言聞たうない。ヤア〜廣純が家來乗物もて」はつと答て杉村より、立出る家來の大勢、乗物を昇据れば、此方も同じく、百川「ヤア〜百川が家來參れ、躬安珍を紀の路の堺へほつ拂へ」はつと答へて立かゝる。「ナウ是しばし」と錦の前が寄り給ふを右大辨、引止めて乗物へ、乗せてびつしやり戸を押閉て、廣純「家來共乗物やれ」百川「家來共安珍をほつ立よ」と、中に二人が仁王立、何とせん方泣く〜も、別行く身ぞ哀なる。跡に二人は顔見合せ、百川「イヤなう廣純公、躬が事に際どつて、親王を奪取る刻限延引いたしたれば、皇子にも無お待兼、貴公は是より御歸宅有つて、此趣を仰上られて下されまいか」廣純「いかにも〜、何方からなり共片付るか忠義なれば、錦の前をさし上たらば無御満悦、貴殿は跡より親王を奪取て來れよ、後刻對面、先さらば」と、引別れて百川は、又杉村へ廣純は、館をさして歸りける。とは知らずして和氣の藏人、「親王のお召なり、安珍殿はおはせぬか」と、呼はり〜出來り、傍を見れ共影もなし。コハ訝しと立つたる所に、間近く聞ゆる數多の音、まつ先に岩倉伴内、他戸の皇

子の命に降ひ、百川が選參を苛ち、下部引つれ駈來り、件内コレコレ藏人、主人廣純、親王を饗應せんと、水屋の社に待受らる、御迎の爲來りし」と、しらなくしくも聲かけたなり。藏人「イヤ其手は喰べぬ件内、いつになき廣純の饗應、馳走を受けずと此方は還御を急がん、立歸つて宜くいへ」と、云捨て行くを件内が、騙討に後より、はつしと切るを引ばづし、扱こそ儕親王を、奪ひに來かと抜打に、はつしくちやうくく、戦ふ内に件内は、二つに成つてぞ亡にける。残る奴原餘さじと、抜きつれかよるを無二無三、あたるを幸ひ切立れば、さしもの大勢こらへ兼、一度に逆るを勝に乗り、汚し返せと追うて行く。其際に百川人目を包む頬被、杉村傳ひに忍入り、親王を奪取り、小脇に掻込み駈出れば、すは狼藉と仕丁共、追駈け出るを事共せず、片手に提たる段半物、振廻し薙立てられ、近付く者もあらばこそ、爲濟したりと一散に、行方知らず落失ける。斯共知らず和氣の藏人、深入しては親王の御身の上も危しと、立かへつて御假屋を遙に見れば、南無三寶、幕も蒔も引亂し、親王は在しませず。扱は敵の計略にて奪取りしか口惜や。いで追かけんと氣も狂亂、かけ出す向ふへ他戸の皇子、大勢引具し寄せかけ給ひ、皇子「コリヤく、藏人、よくも臆が命に背き、件内を殺したな。親王は何所に有る、渡せく」と有ければ、藏人「ア惚けまい、其方から忍びを入れ、奪取られた親王、たとひ金輪奈落へ隠し置き給ふ共、取か

へさいで置かうか」と、齒嚙をなせば扱は早、百川が奪取しと、思へど皇子はさあらぬ體、皇子「ヤア粗忽なり藏人、親王が見えねばとて、此皇子が知るべきか。儂こそよく知つらん、拷問して白状さすか」藏人「イヤサ、いかに抗辨ひ給ふ共、御存じないとは云はせぬく。是非に御在所承らん」と、反を打つて詰よる所へ、皇子の傳驚塚彈正遅れ馳に駆け來り、藏人を押し隔て、驚塚「マア早まるまい兄者人、皇子御存なき上は、奪人は外にあらん。左程大切なる親王の、御在所も知れざるに、皇子へ敵對自滅がしたいか。相手がほしくば此驚塚、兄弟とて用捨はせぬ、サアぬけ勝負」と罵れば、藏人腹にする兼しが、待暫し、彼が詞も一理有り、此場で命を果さんより、身を全うして親王の、御行方を尋んと思ひ定めて、藏人「コリヤ驚塚、兄に向つて舌長の雜言、赦されぬ奴なれ共、仔細有つて此場は引く。必其臆忘れなよ」驚塚「チ、サ、主を奪はれた狼狽者、いらざる贅口きかんより、早く親王を尋出し、二度供奉し奉れ」藏人「チ、夫を汝に習はうか、土を穿つて尋出し、朝敵退治の御旗をあけん」皇子「ヤア存外なり藏人、諸卿は残らず此皇子が味方に付けたれば、最早天位は心の儘、まだ此上にも生公卿原我に敵たふ者あらば、片端に駈立ほつ立、禁獄さして憂目を見せ、腐は天子の位につかん」藏人「其時此藏人は官軍を引牽し、皇子の即位を妨けん」驚塚「夫こそは驚塚が、馳向つて追退け、武勇の譽を顯さん」と、挑む兄弟

いさめる皇子、「ヲ、頼もしと驚塚、ゆよしと藏人、早急け」と、勇の足首袈に響きどろくどろくと踏みならずは、恰も八大跋難陀、緊那羅摩睺羅の勢ひやと、怖れぬ者こそなかりけれ。

第二

大慈大悲の御誓ひ、何所はあれど名も高き、壺坂寺の門前に、参り下向の息休め、煎茶あきなふ床几店、紅前垂の色に染み、花香に愛でる人心、思ひくりに立寄つて、暫く息を繼煙管、疲を晴し通りける。跡に續きて門内より、一連なまめく旅姿、附々迄も當世の、はでな模様を紀の國や、室の郡に隠なき、眞子の庄司が秘藏娘、名も清姫とて透通る、玉にたとへし品形、年も二八の大振袖、誰にひかれん戀盛、娘自慢の村親が、大和廻りに打連れて、遊山片手の氣儘旅、茶みせのさきに立休らひ、母「ナウ娘、涼しさうな見世ではないか、今日は思はぬ道のはか、こんな所でちと休みや、皆も俱に」と腰かくれば、サアお茶煙草と持運ぶ、茶見世の噂が馳走振、嗅マアお前方は何方から何方へお通り遊す」母「イヤ我々は紀の國より、大和廻りを致す者」嗅ヲ、そんなら御存じはなされまい、高香山とて奥の院がござります、序に御見物なされいで、爰から纒十町計」と、咄半へ歩み來る、藤原の少將安珍は過し春日の一落より、父の勘氣を幸ひに、

母の大願満てん爲、熊野參詣三十三度の修驗者と様をかへ、散切髪に輪袈裟をかけ、昔にかはる獨旅、殊勝にも又痛はしよ。暫し疲れを晴さんと、此方の床机に腰打かけ、休らひ給へば清姫は、跡の宿より跡先に見初めし戀の下紅葉、うつろふ色目をおし包み、謂明「申し母様、其奥の院には五百羅漢の像も有り、結構な所ぢやけな。拜でお出なされぬか」丹「テ、娘ようぞ氣が付いた。年寄は明日がしれぬ、そんなら今から参ろかい、其方もおぢや」と立上れば、謂明「イエ〜私も往てはお氣が張る、若者は重ても参られる、お前ばかり氣樂に拜んでお出遊せ。ソレ紅お供しや」丹「イヤ〜二人ながら娘が傍に付いて居よ。俺が供にはコレ噂様、案内がてら頼みたい」嗚「テ、それはお安い事、コレ〜お姫衆、跡の間に参りの衆が腰かけたら、お茶をさし出して下さりませ。イザお袋様御出」と伴ひしこそ急ぎ行く。跡見送つて清姫は、飛立つ斗り思へ共、まだ初戀の恥しさ。如何云懸けたら可かろごと、もぢ〜するを姫の白菊が引取て、白菊「コレサ修驗者様、此姫君は私が御主人、手の筋が見てもらひたいと云兼てござります。御苦勞ながら頼みます」と、いふに安珍扱こそと、思へど態とさあらぬ體、安珍「コレ女中、見らると通り新米山伏、手の筋は扱置いて、足の筋も見る術しらす。こりや許してもらひましょ」白菊「イエ〜諭にさへ怖いものは、山伏の様なと云ひますれど、お前の様な美しい山伏は又有るまい。なん

ほど下^{へた}手でも大事^{だいじ}ない、ナア姫君さうぢやないか」（彌姫）アノ紅^{くわに}の云^いやる事^{こと}わいの、田舎育^{いなかそだち}の不束^{ふたふた}
 な自^{みづか}が手^ての筋^{すぢ}、何^{なに}んの彼方^{あな}が見^みて下^{くだ}さんしよ。もう頼^{たの}まずと止^とにしや。見^みた所^{ところ}が都方^{みやがた}のお方^{かた}さ
 うな、嘸^まお宿本^{やどもと}には美^うしい御祕藏^{ごひざう}様^{さま}がござんしよ」と、うら問^とかけけるも是^{こゝろ}幸^{さい}ひ、戀^{こゝろ}を仕^しかけける寄^よ
 櫃^{がま}、口^{くち}に任^{まか}せる出放題^{でさうだい}、安珍^{あんぢん}「ナ、御推量^{ごすゐりやう}の通^とり都^{みや}の者^{もの}、生拔^{はねぬき}の山伏^{さんぶつ}でもござらぬ。稚馴染^{やこ馴じみ}の
 妻^{つま}に離^{はな}れ、細^こ有^いつて此姿^{このすがた}」と聞^きいて白菊^{しろぎく}、「ソレハまあ、生別^{いゝわか}か死別^{しにわか}かへ」安珍^{あんぢん}「死別^{しにわか}れ、し
 かも昨日^{きのう}が四十九日^{しじゅうくにち}」白菊^{しろぎく}「サテハ左様^{さやう}かお痛^{いた}はしや、若い殿御^{どのご}の髪^{かみ}切^きて、廻國行脚^{くわいこくあんぎや}し給^{たま}ふは、御
 奇特^{くわつてつ}と云^いはうか、心中^{しんしゆう}と云^いはうか、嘸^ま先^まき立^たたしやんしたお方^{かた}とは、中^なが好^よかつたで有^あらうな」
 安珍^{あんぢん}「ナ、よい段^{だん}かいの、其^{その}有^ありしを思^{おも}ひ出^だせば、天^{あま}にあらば比翼^{ひよく}の鳥^{とり}、地^ちにあらば連理^{れんり}の枝^{えだ}と云
 ひかはし、面白^{おもしろい}と云^いふはいや早^{はや}どうも口^{くち}ではいはれぬ」白菊^{しろぎく}「ナニ其^{その}お方^{かた}と添^そて居^ゐさんした間^まは、
 比翼^{ひよく}連理^{れんり}と云^い交^かし、面白^{おもしろい}事^{こと}で有^あつたかへ、左様^{さやう}ぢやあろく。辻^{つじ}の事^{こと}に其^{その}初^{はつ}戀^{こゝろ}より別^{わか}さん
 した時^{とき}迄^{まで}の次第^{しだい}、聞^きいておいたら後學^{ごがく}にも成^なりそな事^{こと}、幸^{さい}ひお袋様^{ふくさ}も爰^{こゝ}にでなければ、互^{たが}に旅
 の憂^{うれ}晴^{はら}し、搔^か摘^いんでお咄^{うた}し」とせがみ立^たつれば、安珍^{あんぢん}「イヤもうそれは此方^{こゝ}から望^{のぞ}む所^{ところ}、咄^{うた}して成
 り共^{とも}日頃^{ひごと}の憂^{うれ}が忘^{わす}れたい。さりながら外^との事^{こと}とは違^{ちが}ひ、まんざら聲高^{こゝろたか}にもいはれぬ事^{こと}、とい
 て其^{その}床机^{しやうぎ}へ腰掛^かけるも、どうやら人目^{ひとめ}が」白菊^{しろぎく}「大事^{だいじ}ないく、其^{その}處^{ところ}から咄^{うた}してはあの茶釜^{ちがま}の煮^に

える音で一つも耳へいらぬ。サア〜「爰へ」と招きて、「然らば御免」と腰打かけ、安珍「いかさま懺悔に罪を亡せぢや、さらば咄を始めうか」白菊「さらば咄を聞かうか」と、簪ぬいて耳の垢、濼てこそは鎖まりける。安珍「先其初戀の發端といふは、去年の春の彌生半、吉野の山の花盛、柳櫻をこき交て、都ぞ春の錦と見ゆる幕の數、爰では琴の爪音の、彼處では三味線の鼓のと、歌ふか舞か面白さ如何も云れず、此處彼處と眺る所に、とある幕の内より出でし、二八斗の娘の顔、見初たが縁のはじめ、日元なら口元なら、思ひ出せばよう似た顔も有る物」と、話しながらに清姫を尻目にかけて思はせ振、娘共も氣をとられ、段々うまう成かゝると、現ぬかして摺寄ば、安珍「其時我等も娘の顔を、餘處ながらちつと斯う見る様で、又見ぬ様で、互に心は通へども」白菊「アノ近付きでもないのにかへ」安珍「サア仙が頻に可愛う成て來て、飛立つ如く思へ共、其日は人目の關をこえ兼て、立歸らんとせし所に、娘はやがて懷より、矢立短冊取出し、さら〜と一首を書付け、娘にもたせ密に我に送り嬉しさ、取上げて開き見れば、其假名の美しさ」白菊「能書で有たかへ」安珍「能書しかも行成様の散し書。サテ其歌は、見ずもあらず、見ずもあらず、見もせぬ人の戀しくば、ハア下の句は何んとやらとんと忘れた」腰元「ヲ、辛氣、大事の所を忘れて」と、娘が勿怪顔、清姫ふつと思ひ出し、酒麴「申し其跡は、あやなく今日や眺め暮さんといふ下

の句ではなかつたかへ」安珍「ホンニそれぢや〜」腰元「シテ〜跡はどうさんした」安珍「其古歌の心の嬉しさに、シテ返事せんと思ふ内、早目もくるよに心せき、彼娘も下部下婢に引立てられ、是非なくかへる後影、見るに堪へかね小者を走せ、名所を問せたらば」腰元「いうたかへ〜」安珍「イヤいはぬ〜、只北山里に結び指たる柴の庵とのみ、心憎しと思へ共、其日は互に別れし」と、聞いて魅力を落し、腰元「エ、残多い咄ぢや」と、清姫諸共投首すれば、安珍「コレ滅多に力を落すまい、それから男の有らう事か、此壺坂の観音へ、七日七夜の願参り、奇驗なお告が」腰元「有つたかへ〜」安珍「汝彼娘に遊んと思はど、供をも連す只獨、雨のふる夜も風の夜も、徒歩や跣足で通ひなば、深き妹脊と成るべしと、聞くより嬉しく我家に歸り、夜更け人静りて密に館を忍び出で、北山里に尋行き、枝折戸ほと〜打叩けば、彼娘出向ひ、扱も遅て待兼ねしと、此手を取て引立てられた其時は、身柱元から」腰元「ぞつ〜と爲たかへ」安珍「ヲ、何が寒う成り暑う成り、夢の心地に覺えしを、イヤ〜此處等が大事と辛抱し、ナンノ待兼たとへ、嘘斗と顔を背けりや、エ、何ぢやの、人にはつかり物思はせ、遅う來ながら胴慾と取付く袂をふり切て、罷歸ると立上るを、イヤ去なす事はならぬ、イヤ去んで見しよ、去なすまいが如何さんす」と、仕方咄に聞入る清姫も、相撲を見物するごとく、肩を捻り身を縦ば、安珍「イヤど

う有ても去ぬるく。イヤくならぬとしがみ付き、離さぬ所を振切て」と、咄の拍子に清姫は、床机の上より眞逆、こけ落つるを媿か、周章かけ寄り抱起せど、正氣つかねば、腰元「コレお姫様、御姫様、ヤレお山伏水をく」おつと心得杓おつ取り、茶の水汲でさし付くれど、齒を喰ひ締め通らねば、詮方なくて安珍は、自身に含んで口から口、ずつと通つて人心地、腰元「さつても氣轉のきいたお方、お氣が付たぞ嬉しやく。コレ申し清姫様、氣をはつたりと持ち給へ」と呼立つれば漸に、マアと答へて目を開き、腰元「白菊紅か、今自は床机の上から落て目が舞たの、何やらひいやりと咽喉を通つと思つたれば氣が付いた、其方衆が水でもくれたである」腰元「イエく私等は狼狽て呼生るばかり、あのお山伏が水を上けうとなさつても、齒を嚙しめてござる故、彼方の口からお前の口へ」腰元「マア自が齒を嚙しめて居たのゑに、口から口へホ、およ嬉し。そんなら大事の命の親、忝いといひたいが、もと此身を殺さうとなされたも彼方故、いつそ今ので死んだらよいに、生きて結句思ひの種、やつぱり死なせて給いの」と、現なければ媿共、腰元「お姫様の無理計り、私等ちやとて如何せうぞ。コレお山伏、お前が御療治なされし故、却つて姫君の機嫌が損ねた。元の様にしてお返し、殺して御機嫌直して」と、無理からしかける仲人口、安珍「それは無體と逆廻るを、白菊、紅てん手に押伏せ、清姫の傍へ推遣押付れば、元より互に戀の淵、深き

戀路の始めなる。斯共しらず母親は、奥の院より立歸り、母「ナウ娘、嘸待ち兼たて有らうの」と、いへ共清姫應答なく、さし俯向いてうづかりは、瘧ふるひの大熱の、冷めたる跡のごとくなり。白菊が笑止がり、白菊「お姫様は如何した事やら、お腹が痛んで難儀遊ばし、あのお山伏のいかいお世話になされし」と、聞くより母は恟し、母「それはまあ何方かは存ませぬが、お世話の段忝うござります」と、一禮述て、母「コレ娘、もう痛は止つたか」清姫「アイお氣遣ひなされな。もう常の通りに成りました。マア結構なお藥を」とぢつと見やりし目の内へ、安珍も飛入る心地、母は何の氣もつかず、母「お山伏は清姫が命の親、是を御縁にお知人に成りませう。お國本は何處ぞ」と、いと懇に尋ねれば、安珍「其は都の者、ちと願望有つて熊野參詣、三十三度を致すもの」母「それは幸我我は則ち紀州室の郡の者、重てからの御參詣にはお宿申しましよ。眞子の庄司が後家娘」と、打込じたる折こそあれ、里に名うての唄者、鷲の四郎八、烏の九郎助、茶店の先に立ちはだだかり、四郎九郎「コレく旅の女中、牽制な事ぢやがあの娘御が貰たい」母「エ、イ」四郎九郎「いや別に悪い所へやるのぢやない、忝くも他戸の皇子様より、何者によらずみめよき女は整へて差上げよ、褒美は望次第との御上意」母「マアそれはまあ思ひがけもない事、なんほ皇子様の云付でも、たつた獨の祕藏娘、滅多に渡す事は成りませぬ」と、口にはいへど當惑の、色目を悟つて安珍も、

狼藉せば見遁しならずと、身繕ひして待ち給へば、四郎、九郎「ハアテ合點の悪いお袋、品によつたら此方衆も浮み上る事、四の五のなしに下あれ」と、せがみ立つれば母ははつと心付き、「どう仰つても成りませぬ」四郎、九郎「ソリヤなぜに」母「イヤあの娘には夫がある」禮延「エ、イ母様そりや何を」母「ハアテ其方にはあれ、ノあれ、あの山伏殿といふ夫が有るによつて、皇子様へさし上る事はならぬぢやないか。ほんにそれく、コレ申しお前も聲は俺ぢやと、つい云たがよいはいな」安珍「サアさういふは安けれど、彼等に一盃喰すつもり、サア皆汗が入つたらそろく先きへ往たがよかる」と目眇で知せば母娘、媿共も領き合ひ、足早にこそ急ぎ行く。エ、一盃くはせた腹立やと、九郎助やがて安珍の胸倉に取かよる、其間に四郎八茶店なる手桶引さけ、聲殿祝ふと投掛るを、安珍得たりと身をかはせば、先きに進みし九郎助が、さんぶりいはされ濡烏、コリヤ何しをると飛びかよる、仲間喧嘩の擲合、跡に見捨てて 三重急ぎけり。歸り行く月日計りは變れ共、變らぬは世の憂節や、竹の格子に井の字窓、荒し家居を假初に、宅替してまだ昨日今日、浪の身の寄る年も、六十に鳴見郷右衛門が、娘相手に内繕ひ、走据たり棚釣たり、打つたり舞たり垂歪、無頂頬面直しても 足はぬ物で間に合す、素人細工ぞ不束なる。郷右衛門ほつと相盡し、郷右「コリヤ苅藻、庭廻りの勝手がよくば、まあ是切りで置うちやないか、人傭へば錢が出る、

それ出すまいと腕いた代に、肩も腕もめりくむりく。ヤ、むりくの次手に無理な男は、今迄るた在所の家主、浪人を見立てて半年づつ家賃を先取、ない物寄越に困つた故、道具屋の與市の世話で此奈良の町へ宿かへたりや、まあ此難儀を助かつたが、いかに貧乏すればとて、よい年して佛壇一つもたず、大事の祖師様を押し入へ打込んで古蒲團と相任せますは、いかにしても勿體ない。殊に今日は七月十三日、祖師様の日でも有り、聖靈祭がそこくになと仕たい。幸ひ與市の所に、よい頃な佛壇昨日ちよつと見て置た。俺あれか欲うてく、如何も斯も堪まらぬ」新譯「サアそりや私もさう思へど、其銀の才覺か」鶴右「イヤならぬ所をほつくと、いらぬ物賣た銀が四拾目餘り、あれでどうぞ賣てくれりやよいが」新譯「ハテそれこそ與市殿にまあ談合して見さしやんせ」鶴右「ホンニそれく好う云うてくれたな、善は急げちやちよつと往て來う。其間に其邊掃いておけ」新譯「つい居てござんせ」合點と、銀懐に押込んで、氣もわく雪駄はく拍子、轉たか打つたかあいたしこ、新譯「爺さん何んとさしやんした」鶴右「なんとは是見よ、古木の片に釘が有て新指をぐさと云はした」新譯「ドレくほんに血塗ちんがい、なう情なや」と血止に煙草、付けるもはらく、日に涙、鶴右「ハテこな者はめろくと、申の年でもないが血を見る」と泣程にの、なんの是式、俺痛うも痒もない。たとひ身打をきられて死んでも齡もない此親仁、

ちつ共惜うはおぢやらぬ」と、氣輕にいうて勇行く、後の哀と成りぬらん。娘は跡を取片付け、掃つ拭うつ急がしき、表へ息急馳け来る女、すつとはいつて顔見合せ、女「マアそなたは苺藻ぢやないか」苺藻「コレハく錦の前様、徒歩や跣足で只お獨、何としてお出なされた、様子はどうぢや氣遣な」と、問れて涙にくれながら、錦の眞知りやる通り安珍様に引別れ、悲しき中に伯父様が、是非自を皇子様へさしあけんと強意見、居るに居られず籠を脱出で、何處に成共身を忍び、殿御の行方を尋ねん物と思ふから、其方の内とは夢にもしらす断込たのも不思議の縁、追手の者が來ぬ内に、早う影を隠してたも、頼むく」と氣を苛ち、そぞろ顫うて在します。苺藻「ナ、それなればお道理く、私もお前と安珍様の媒したが誤とて、隙の出るは此方も勝手、胴慾な伯父様に、ふツつりと飽參らせ、今親の内へ戻つて居るこそ幸、命にかけてお隠匿申しませう、というてから何處に置きます所が」ナ、有るぞく、只一つの車長持、御窮屈に有らう共、まあ此内へ」と押開き忍ばす、内もうろくあぶく、あつた蓋して車鎖手早にぴんと折こそあれ、いそぐ歸る郷右衛門、無有娘悦んでくれ買たぞく、直打、安て結構な佛壇、今爰へ持つてくる筈、一時も早う尊聖殿へ果物が進ぜたい。ソレ暖簾にする素麴瓜茄子、何やかや取揃へて買うておぢや。今日の日が外れてはならぬ、早うく」とせがまれて、往ぬ

ばならず跡も氣遣、不承々々の舌鼓、丹波笊に袖おほひ、足早にこそ出でて行く。エイくくくさつくくさ、「サアくく爰ぢや」と佛壇もたせ、によつとはひる道具屋與市、與市「ホウ親仁様早かつたの。扱今もいふ通り鑑ひらなな、利とらず元直で寄越が六拾目、受取つた銀は四拾壹匁五分、引残つて拾八匁五分の足らず。其代に何やら寄越道具が有るとは、どんな物か。マア見よかい」與右「ヲ、見せうともく、といつて替つた物でもない、それ見て下され」與市「それとは何を」與右「ハテ其車長持、見掛は汚穢いやうなれど、昔物で第一木がよい、鐵物の見事さ、中の様子もとつくりと、ハアこりや猪口才な、娘が錠をおろして置いた。イヤ見せる迄もない、中に微塵も疵はござらぬ」與市「成程々々、至極丈夫な長持、マアなんほ程なら賣らツつしやる」與右「ハテそりや此方の目一ぱい」與市「付けませうか、ハ、アこりや丁ど拾八匁五分には高過ぎる」與右「是は扱、おりやもつとせうと思つた、もう貳參匁買はれぬか」與市「けもない事、まだ五分たりませぬが」與右「是非に及ばぬ何とせう、それでさつぱり濟して貰を」與市「ハテよござるわいの、念頃合ひに五分や七分、きつしにもいはれまい。そんなら是で算用なし」さらりくと手を打つて、下人に長持引すらせ、其内御座れ好う御座た、さらばくと立歸る。與右「ヤレく嬉しや、久振で祖師様佛壇へ直しましよ」と、押入より取出し、佛具とりく香盛つて、題目唱ふる時

こそあれ、娘がわくせき供物、買調へて戻るやいな、須藤コレ父様、爰に有つた長持は、何方へ直して置かしやんした」と、けどん顔見て親仁はうぢく、舞右サアさう云はうと思つた。いつせき一つの入物なれど、佛壇の銀がたらぬ故、其代りにやつてのけた須藤エ、そりや道具屋の與市殿へか舞右おうさく須藤テモひよんな事さしやんした。コレあの長持の中にはな舞右ハテ何んにも無い舞右イヤお前は知らしやんすまいが、私が今迄勤て居たお館の姫君が、様子あつて家出なされ、追手がかゝる隠まうてくれと仰つたゆゑ、今の長持の中へ舞右ヤ、そりや大切な事、様子は知らねど其方を見込んで頼れた姫君、外へやつては一分立つまい。というて價の銀はなし、結句おれが與市に逢うては、四の五のいうて戻すまい。其方が往て云はうには、留守の間にやらしやつた長持は、私が大事の入物なれば、賣る事はならぬ。足らずの銀は近い内寄越さう程に、まあ戻して下されと品よういうて取戻せ。與市が中を見ぬ内にちやつとく」といふを聞捨て氣を揉み上げ、足ら取次に駈り行く。舞右ハレ忙しいに取ませて、思ひもよらぬ難儀が出来た」と、咬ながら果物を、佛に供へ水手向け、唯我量無量と唱ふる内、如來寺の弟子他方坊、十方且那を棚經廻り、表に立つて手帳を繰出し、ぬつと入つて親仁を押退け、持佛に向ひ大呪を唱へ、他方坊、光明、遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、なまいた

まないだくくくなまいだ佛なまいだ」獨右「ア、是々、經宗の内へきて、念佛申て叩鉦ぐわんぐわんと何ぢやぞいの」他力坊「願以此功德」獨右「コリヤきやうとう施一切、同發菩提心」獨右「コレ坊様、爰は法華宗でござるはいの」他力坊「マアほんにさうぢや、デモ此内は此方の旦那に極つたが、どうやら御亭主の顔が、マアこなたは兄貴、らやないか。俺や他力坊でござるわいの」獨右「マアどれく、成程弟坊ぢや。ヤレく、久しや懷や、二十年も會はぬ間に老くろしうなつたで、とんと顔を見違へた」他力坊「イヤおれより此方の年がよつて、前の形はござらぬ」獨右「チ、さうで有らうく、貧苦にせまれば一倍皺に皺のよる年、今日が日も知らねば、其方が事を明くれ案じて逢ひたかつたに、好う來てくれた。シテ今は何處にゐるぞ」他力坊「何處というたら前の如來寺に勤てゐますが、此方は何時爰へござつた」獨右「サレバ漸昨日宿替」他力坊「エ、それでよめた。此家に是迄居た人は林專太夫というて、此方の旦那、表の家札がやつぱり有るゆゑ、庵相しました」獨右「イヤそりや此方にまくらぬが大きな無念」他力坊「イヤ其無念と庵相が合うたで、兄弟もべつたりあうて嬉しい。扱姪の荊藻は息才で居ますか」獨右「サア娘も今は奉公引いて内にゐるが、様子有つて主人の姫君が家出なされ、隠し置いた長持を、留守の間に道具屋へ賣つた故、それ取返しに今出ていた 追付け戻らう逢うて去にや」と、積る咄を遣羽子

に、突掛とつ掛稍時うつる折こそあれ、はんらや合羽に三度笠、旅人と思しき侍が、うそく
邊を見廻して、用有りけに立つたりしが、笠取捨て身繕ひ、すつと入つて、侍御亭主に御意得た
い」と、聲かけられて郷右衛門、郷右衛門の主は某、何方より御出」と、云はせも立てず、「親
の敵、遁さぬ」と、引抜いて郷右衛門が、弓手の鬮すつばと切れば、郷右衛門粗忽して後悔
すな、敵と呼ばると覺はない「侍ヤア覺ないと卑怯者」と、無二無三に切付け、踏ふ所
を覺み掛け、諸脛はつしと雉倒せば、「コリヤ待て〜」と他力坊、取付く腕先引揃み、戸口
を打こし五六間、大道遙かに取つて投げ、ふりかへれば郷右衛門、數ヶ所の痛手老の身の、う
んと計りに息絶ゆれば、ハア〜はつと騙寄て鬮引上げ侍「是は扱、大切なる劍の在所詮議せ
んと思ふ間に、早斃ばつたる残念や」と、死骸にどつかと打跨り、親の敵思ひしれと、留の刀
一扱、突立ち上れば他力坊、手並に懲て怖々ながら、大事の所と氣を取直し、そつと寄つて、
他力坊「コレサ前髪、此親仁は愚僧が兄、生得正直慈悲深く、無益の殺生せぬ者なれば、滅多に人
を切りやせまい。其上今の一言、敵と呼ぶると覺はないと、いうたを無慥に切りちやくくり、
留迄好うぐしやとやつたなア、粗忽で有らう、人違とは思へども、腕力が強さに困つて居た。
マア其方何者、何の遺恨で親を討れた、慥に兄を敵といふ、證據が有るか。それ見たい、仔細

が聞きたい、サアなんと」と、驚ひくも腕捲り、弱味を見せずちつくく、詰寄りく振廻す、坊主頭ぞ健氣なり。侍ホ、其仔細は一天下に隠なき敵討、某は島城源藏兼連といふ者、去年の秋當國樞の本に於て、我が親權頭を討つて、雷鳴丸の劔を奪取つたる林專太夫、某が斯く付狙ふともしらず、表の家札に名を記したは天命」と、半分聞いて、他力坊「そりやこそ大きな人違。コレ其專太夫が事は、疾く宿替したる山、漸昨日此所へ、家移りした我兄は、鳴見郷右衛門といふ者、察する所專太夫、儕が科を人に譲らんとため、家札を残し置いたと見えたり。それを其儘置いたも誤、討つた此方は猶誤り、誤といふ誤によい誤りはなければども、是はあんまり惨しい、取返のならぬ誤り、エ、是非もなや残念や」と、目を摺こする涙顔、色もかはつて青柿が、熟柿弔ふ如くなり。源藏大きに仰天し、源藏何、此人は郷右衛門、專太夫ではなかりしか、南無三寶しなしたり、ハ、ハ、ハ、ハはつと我れながら、あまり惘れて詞も出ず、たゞ茫然と立ちたる所へ、又間違て姫君を、道々尋ぬる娘の苺藻、駈戻つて、切つた、何者の所爲ぞ」と、狂氣のごとくうろく涙、死骸にひしと抱き付き、泣くより外の事ぞなき、他力坊「ホ、思ひがけなき父が最後、驚きは尤々、久しう逢はねば見忘れつらん、愚僧は叔父の他力坊、家札を證據に敵と心得、兄郷右衛門を手にかけしは、ソレ其處に居る源藏」と、聞

くよりはつと身繕ひ、源藏「エ、腑中斐ない叔父様、いかに出家の身なればとて、それ程様子を
知りながら、兄の敵を傍に置き、なせきよろりとして居さしやんす。人違でも鹿相でも、目の
前の親の敵、一討延ばせば一時の不孝、女でこそ有らうけれ、物の見事に討て見せう切つて見せ
う。サア尋常に勝負しや」と、父が刀をおつ取つて、早打かけんと立ちかよれば、他力坊ヲツト助太
刀他力坊、氣遣するな」と尻引きからけ、有合ふ播粉木しやかにかまへ、後に突張坊主の腕立、危
くも又潔し。ちつ共騒ず源藏兼連、大小掴んでからりと投出し、源藏「コレ此通り手向ひせぬ、
相手にならぬ」と云はせも立てず、源藏「ソリヤ何んの眞似。此期に及んで手向ひせぬは、ム、
聞えた、逆も我々に叶ふまじと、命惜さの降参か、詫ても泣いても遁しやせぬ」他力坊「ぐづかは
せずと、サアきりく」とやりかけうてい」源藏「ハ、ハ、事をかしや腹の皮、生付いて此源藏、
力量人に勝れたれば、汝等が五人七人、片腕にも足らね共、誠の敵専太夫を討されば、父が孝養
にもならず、誰が身の上も敵を討ち度き志は同じ事、いかに我身を遁れんとて、今兩人を返討に
せば、情なきとや云はん、武士たる者の本意にあらず、爰が互の了簡づく、たとへば敵専太夫、
逃隠るゝ其天地の間、足手限りに探し出し、本望遂けなば其後は、旁に此源藏、潔く討たるべ
し。それ迄何卒此勝負、さし延ばして給はらば、雙方共に本意を達し、互に亡父の手向となら

ん。此詞僞あらば諸神諸佛の御罰を受け、二度刀を手に取るまじ。了簡あつて給はれ」と詞を盡し理を盡し、わりなく頼むぞ誠なる。理聞いて他力坊、實尤と得心顔、いつかな聞かぬ苧藻が若氣、苧藻「コレ誓言立聞きたうない。よし其詞が誠にもせよ、專太夫とやらいふ敵に、何時廻り遭うやら、べんくだらりと當處も切もない穿鑿、一寸の間も待たれぬく。討ち討たるよは互の運づく、サア其方から切りかけるか、此方から討たうか。ヲ、何と勝負々々」と、ふり上げる刀をしつかと他力坊、腕首返し挽取つて、他力坊「コリヤまで苧藻早まるな。エ、いかに女なればとて、理非明らかなる源藏の詞、聞入れねば今返討、それを是非にと身を蹴くは、鼠が猫に楯突く道理、近年の無分別、但むざく犬死して、父郷右衛門が手向に成るか、手柄に成るか、却つて修羅の苦患の上塗、不孝の罪科恐しうは思はぬか。其上最前様子をきけば、隠い置いたる主人の姫君、間違つて道具屋へ渡せし由、そりや如何した」と、問はれてはつと心付き、苧藻「なう情なや其姫君は、何處の者やら長持共に、買うて去んだと亭主が咄、それから戻る道すがら、彼方此方と尋ねても、何處へ往たやら行方が知れぬ。ひよんな事しました」と、涙ぐめば、他力坊「ソレくく其様な大事を抱へ、此場でやみく切殺され、どの命で姫君を取返へす。其方も武士の娘でないか、義を立て道を辨へて、源藏の詞に隨ひ、時節を待つて專太夫に廻台

ひ、潔く本望遂げさせ、其上で源藏を討ち姫君を尋出す、性根はないか狼狽者。エ、緩しや、齒痒うてならぬはい。なぜ其様に愚癡なぞ」と或ひは叱り或ひは宥め、息筋張つて吞込ます、理窟理解のたらくく。汗を流して制するにぞ、苧藻は漸氣を取直し、苧藻合點しました伯父様、成程仰に隨うて、敵打は延しませう。コレく源藏様、言ふに及ばぬ事ながら、契約違へずいつくでも、専太夫を討ち給はど、早速知らせて下さりませ、その便りを聞く迄私は爰に獨住。おいとしや父様が、思ひ寄らぬ此災難、今日を限りに死なしやんせう端か、俄に佛壇ほしがつて、足らはぬ銀でわくせきと、行さまの怪我といひ、氣にかよる物のいひ様、斬られて死んでも大事ないの、今日の日が外れてはならぬのと、聖靈祭の供物、手向の水も香花も、我身の上とは知らずして、氣を苛だてて世話やいて、果は憂目に新尊聖、祭らるゝ身とならしやんしたは、味氣ない共悲しいとも、あるにあらぬ我が思ひ、推量あつて今一聲、娘よ子よと呼んで給べ。父様なう」と亡骸に、すがりつき押動かし、涙の限り聲限り、泣き口説くこそ道理なれ。當前の理に他力坊、張詰のし氣も打萎れ、他力坊ヲ、悲しいは尤々、我迎も廿年來逢はざる兄、今日思はずも間違つて、對面したも血筋の縁、兄貴ぢやないか、他力坊でござるといふたりや、年寄つて今日が日も知らず、遇ひたかつたに好う來てくれたと、地獄で地藏見た様に、

取付いて悦ばしやつたを見る様な。死ぬる者は人懐しく、知音近付まで尋ね慕ふといふに、まして兄弟遇ひたうなうて何とせう。人は知らねど自然天然、急げくと心せく、冥土の旅の暇乞、語るも問ふも今生の、別れで有つたか悲しや」と、我を忘れて大聲上げ、わつと叫べば源藏も、思ひを察して貰ひ泣、防かねてぞ見えけるが、やゝあつて氣色を正し、源藏「御歎きは去る事ながら、時刻うつさば却て亡者の爲にもならず、某とても御了簡の上、長居は無益。一刻も早く敵の行方尋ねたし、お暇申す」と立出づる。他力坊「待つたまづ暫く、見らるゝ通り我は出家、殊に師匠に仕ゆれば、何事も心に任せず、便なき此女、敵討の實否を聞くまで、安閑と待居る心も定かなるまじ。日本國を尋廻る敵の次手、おのづから姫君の行方も知れまい物でなし、面倒ながら行くさきぐ、召つれて給はらば、彼も我も彌安堵。偏に頼み存する」と、餘儀なき詞に打點き、源藏「それこそ此方に望む處、逃隠せぬ此源藏、行住坐臥にも心を付け、附け添ひ給はど旁の、疑念も有るまじ。某も、心にかよる雲もなく、敵を尋ね行先は、東に奥州外が濱、南は紀伊の三熊野山、西は九州壹岐對馬、北は越後の荒海まで、千里も飛び、萬里も追駈け追廻り、速に討ちおほせ、父の尊靈に手向なば、其場を去らず首さし延へ、本望遂げさせ申すべし。いざ打立たれよ苧藻殿」他力坊「ヲ、潔し頼もしよ。それく用意」合點」と、小袂きりと帯引締

め、刀を流石武士の、娘實氣も立派なる、取形凛々しく引そうて、菊養、伯父様さらば。諸事萬事跡はお前を頼みます、随分お健康で「他力坊」そつちも無事で跡は氣遣なき人の、菩提を弔ふは出家の役、我は淨土、彼は法花、兄弟宗旨は變れども、八宗九宗の心をよめば、峯は雪、籠は電、里は雨、解れば同じ谷川の、水溜らねは宿らず去らぬ眞如の月、迷はぬ道に引攝せん」と、死骸に合掌手向の水、掲ぐる火影は則ち光明、十方世界の雲晴れて、普くてらす本願力、誓に任す他力坊が、教に別れ出でて行く。

第三

鞠場の四方は花柳、柳腰なる女房の、ハリヤ恐れの聲するは、杏は離れず冠を、遁れて隠居飛鳥の里、和氣の前司濱成卿の隠家も、お留守の内の鞠遊び、蹴ると踏むとで笑ふやら、「好う掬うて」と譽るやら、姉の八重垣妹も、同じ嫁菜の齒を染めて、肩で流して、奴へ、渡せば横に蹴飛ばかす、附々までも鞠稽古、かよりの内の色めくは、ませた様でも好もしよ。熊野より、下向の道の戀風に、揉まれて頭巾俗懸も、絹になしたる綾の袈裟、首に纏うて安珍は、齋料乞うて通りしが、ふつと見上げて、安珍ハア、是はたしか濱成の隠居屋敷、舅御に仕へ、妹どもはま

めで居るか。久しう逢ぬが何としたぞ」と、思ひ廻する折からに、かよりを越て外れる鞆、塀の外
 面へ飛來れば、安珍「コリヤよき物を下されし」と、安珍やがてひろふ内、娘どもが取りに出て、
 腰元「悪洒落な山伏さん、戻してく、もらかして」と、縋れば拂ひ一曲と、昔忘れず蹴る鞠は、
 草鞋懸とて捨られず。内に待かね妹の檜垣、物見に上つて表の方。見越す外面に鞠蹴るは、あ
 りや慥兄様、檜垣「安珍様ではないかいな」と、いふに八重垣かけ上り、八重垣「ホンニ兄さん、なつ
 かしや。ナアまあ爰へ」と、招くにぞ、此方も見上げ久しやと、裏門よりも走入り、安珍「珍ら
 しの妹達、變り果たる安珍が、姿を見せるも耻かし」と、打しをれるれば八重垣も、八重垣「其お
 姿の變りし事、聞いて檜垣と云出して、泣いてばかり居りました。まあ息才なお顔を見て、
 お嬉しいと申さうやら、おいとしいと申さうやら、皆父上のなす業と、思へば恨むる方もなし。
 いかにお苦勞遊ばすか、前よりお顔もナウ妹」疲たはいの」と涙ぐむ。檜垣「お顔の疲より此袈裟
 や、錫杖は私や悲しい」と取付いて、わつとばかりに泣しづむ。安珍も俱涙、壓へかねしが氣
 を取直し、思ひをかけじとしらぐしく、安珍「イヤもう、今はいつそ氣散じ、母人の大願の、
 三十三度の熊野参りを始めて、もう四五度も参つた。扱先づ問はう、八重垣の連合、和氣の藏
 人は、日頃身共とは懇切、かはらず親王様に付き、宮仕して居らるか」八重垣「ムウそんな

らお前は何にも知らずか、何時ぞや春日へ御参詣の折から、何者とも知れず、親王様を奪取つて、お行方が知れず」安珍「ヒヤ」八重垣「お供した我夫は、取返さねば館へは歸らぬと、二月に餘れども、今に音もさなりも致しませぬ」安珍「ホイ。して、檜垣の連合鷲塚彈正は、何としてぞ」八重垣「是はやつぱり皇子様に付き添うて、御位讓の相談で、是もすつかり館へは戻られず、私等兄弟の物思ひ、推量して下さんせ」安珍「スリヤまだ御位讓の評議が濟まぬか。俺も濱成卿のお目にかゝり、次手に勘當の詫願ひたい。鞠遊したが御隠居か」檜垣「否へく、姉様や私等が、若しお相手とある時の、遊びがてらの下稽古、ほんに勘當の願は、舅御様がよい手懸り、逢せましたいものぢやが、ナア姉さん」八重垣「それいなう、折わるう都左大辨兼實公より密のお召、今日は大方お戻りあらう待つてお逢なされぬか」安珍「待たうともく、たとへ五年が百年でも、齋料さへ貰へばやさが馬、三里乗つたで草臥た、一間へ參つて休息いたそ」八重垣「チ、それ、妹案内しや」檜垣「サアまあ此方へ」と妹が、つれて一間へ入りける。何かな馳走と八重垣が、妣ふんで云付る。折を構はぬ取次番、取次齊申上げます、紀州室の郡の者、母娘と相見え、濱成卿へ直訴と申す、お留守と申せば奥方でも、お逢ひなされて下されと、お次に控へて居ります」と訴へ出づれば、八重垣「ナニ紀の路の者が、お留守ならば奥方へ會はうとな、女とあれば苦しいな

し、是へ通せ」と云付けやる。座を改めて松に梅、老木と花の親子連れ、眞子の後家と娘とが、田舎育も場うてせず、會釋こほれて立出づる。八重垣も只ならぬ人と見込んでしとやかに、八重垣「舅濱成様には、今御隠居の御身でも、折節事のおり登り、其お留守へ來かよりて、嘸本意なく思されん、自は八重垣とて則ち嫁、仰おかるゝ事あらば、御遠慮なう」と懇に、挨拶あれば笑顔をつくり、母コレハく下司近いお詞、妾は紀州室の郡眞子の庄司が後家、是なるは清姫と申して娘。大和廻りの序ながら、同道して参りし仔細、日外お貸し申した、雷鳴丸の劔の事」といふ内よりも、いや其劔は紛失と、云はんと爲しがおし黙り、八重垣ハテナウ遠くの所を好うこそく。娘御は大和廻り始めてか、爰も飛鳥の變る瀬と、歌にも讀みし都跡、名所古跡を教へうか」と、機嫌取かけ催促の、劔の事を紛らかす。清姫も目馴せぬ、所咄の聞きたさに、番頭「是は有がたいお詞。七瀬の淀と萬葉に、讀みし名所は爰なりと、聞けど白齒の振の身で、問歩かれず家苞に、ちとお咄し」と措寄れば、子に絆されて母親も、母それく序に雲の上咄、承つて土産にしや。妾はちつと御勝手のお茶荒しましよ、お免し」と立てば茶の間に案内させ、劔の返事をくろめると、此方は主濱成の、お歸り暫し松木焼く、勝手の方へぞ入りにける。跡に八重垣清姫の、手を取り南に指さして、金峯山より教かけ、「西に葛城當麻寺、一上が嶽の

すんとして、殿御にしては揉上の、厚鬢繁りに繁つたは、どうもいはれぬ山の風、あつたものではないぞや」と、教へ給へば、「實誠、しやんとして、凜として、わけて戀しき峯の松、人で云をなら散切の、いとらしいを見る様で、どうやら傍へ行きとなる。あの松とんとはづめかし、ならぬ事か」と眺めいる。折節安珍鞆手にする、ひよこく出でて、安珍「コレく八重垣、我等も昔を思ひ出し、沓装束で蹴て見たい、相手が無い、詰めてたも」と、いふ聲娘がちらと見て、清姫「ヤアお前は」と驅寄れば、ホシニこなたは壺坂でと、言はんとせしが妹の傍、疵持つ足で口籠り、安珍「さつてもよう似たく」と、云紛せば八重垣は、それと悟つて氣を廻し、八重垣「幸ひ鞆のお相手に、此娘御を貸しませう。そもじも彼方に名所を訪ひ、邊に誰れも目なし川、耳なし川の流をば、見て楽しんでお歸り」と、知つて其場をしらせずに、奥へ行くこそ粹ならん。跡に安珍嬉しさも、胸にせかれてどきついて、安珍「壺坂でのお女中は、何として、マアようお出」と、差詰つたる挨拶に、清姫は猶うちくと、清姫「私は母様同道で、願の事で好う来たが、お前はどうして、ようお出」と心餘りて詞なく、遠慮深いは下紐の、解けぬ業とぞ聞えける。安珍も頭から仕懸やうなく仲人なく、はづます思案で鞆ひねくり、安珍「我等が来たは此鞆に、又逢ふ事もあらうかと、引れてふつと參つたが、見懸の様にむつちりと、手當りのよい心なら、

肌に抱きしめ寢て見たい。口先ばかりのかい摘み、紫皮になる程な、深い心はあるまい」と、氣を持たずれば氣を持つて、清姫「ナアニよい手な事ばつかり。此方は疾うから鞠になり、早う蹴られて見たけれど、先のお方が厭かして、教へてくれる氣がない」と、戀のいろはの帆掛舟、漕付られて安珍は、安珍「習ふ氣ならば教へうか、傳授秘傳がある事」と、戯れ寄れば清姫も、清姫「そんなら教へて下んすか」安珍「教へいで何とせう」清姫「ヲ嬉しや」と取付いて、糾合ひたる折から、「旦那お歸りく」と、呼ばはる聲と足音に、二人は恟り狼狽へて、其處よ、爰よと駈け廻り、忍ぶ方なく鞠場の内、二人は暫しと身を隠す。程なく主和氣の前司、年を欺く身の達者、頭に雪は戴けど、心は花の都より、歸り足なみしとくと、座敷へ通る跡よりも、眞子の後家がしたひ出て、母「申し濱成卿と見受け奉り、申上たい事あつて、待受けて居りませし」と云ひかけられ振かへり、濱成「ムウついに見馴ぬ老女、身に用事とは何の用、何處の人ぞ」とありければ、母「妾は紀州室の郡眞子の新左衛門が母でござりまする」濱成「コレハく去める頃は、わりなき無心、それより音信も怠りし、近頃無沙汰」とあしらひに、母「コハ有がたい御上意、濱成様の仰とあるゆゑ、お渡し申した其劔は、雷鳴丸と申して、家の重寶、御用立てしまうたら、お戻しも有らうが、幸ひ娘が大和廻りの序、立寄りお尋ね申すのでござりまする」と、述べければ、

濱成當惑の顔色にて、濱成誠に其劍恩情の砌は、公の御用とばかり云遣し、仔細云はせなんだも、祕する大事。何を隠さん日本の神寶、十握の寶劍紛失して、有所知れず、某奏して曰く、眞子の家の、雷鳴丸と申す劍は、神代三振の寶劍、是を假の十握となし、御即位あらば、何か恐れ候はんと奏聞し、扱こそ劍を、無心中しにつかはせし氣の毒は、此末の物語。其使者に行きし身共が家來、葛城權頭といふ者、林專太夫といふ者に討たれ、其劍を奪はれたり」母「エ、濱成」まつた其後、春日の社にて、山の部の親王を奪取る、これも何者の業とも知れざりしが、天命遁がれず藤原の百川が計ひにて、己が館に土の牢を拵へ、押込め置しと慥な評議。さるによつて此劍も、百川が計ひと思しめす其仔細は、盼安珍といふ者を、術なくして勘當し、行方隠す。正しく此盼に二振の寶劍を持たせ、逐電させしに極つたり。急ぎ安珍めを捕へ、天秤鉛責にもせよと、評議一圖に極りし」と、聞て安珍鞠場より、出んとすれば清姫が、引止めく、餘處の事よと安珍が、今身の上とも白縫の、小袖の内に抱しむる。眞子の後家は様子を聞き、母「テモそれは思ひ寄らぬお咄、手前の劍は數ならず、マア大切なト拵の御劍御評議が肝要、大方其安珍とやらが、親と一味でござりましょ」と、安珍を安珍と知らぬ母親濱成も、鞠場に居るとも知り給はず、濱成「兎角評議は彼の盼、見付け次第に擲取らん。老母は立歸り新左衛門へ詳

しく語り、貴殿の方の劔の詮議、俱々頼むというておくりやれ。寶劔の見えざる事、必々沙汰無用」と、仰あれば、母「何が扱、假初ならぬ一大事、手前の劔は手前から、詮議いたすがお上へ奉公、一時も早く國へ歸り、駈に委細申し聞かさんもうお暇」と立ちけるが、娘つれんと邊を見廻し、母「清姫其處にか、清姫」と、呼たけられて爰にと、いうて出られぬ鞠場の内。母は猶しもそこ爰と、尋廻れば濱成岬、濱成ナニ尋召るゝは、同道の娘か。奥にがな遊びつらん、序に呼出しおません」と、座敷を立ち一間へ悠々と、入る間もひやい冷汗を、身内に流し邁れける。跡に母親うろくと、若しやと思ひ勝手の方、「娘々」とよぶ内に、首尾見て清姫走り出て、清姫「無母様お待兼ね、嫁御さん方とおりは打、隙が入つた」と間を合す、母は何の氣もつかず、母「ナニ嫁御さん方と雙六打つて居た。ヲ、出来しやつたく、能くく、深い御縁と有難う思やよ。彼方方は雲の上人も同前、又こんな首尾ないぞや」と、思合する一言は、正直過て氣味悪し。娘も心に勿體ない、親を騙すと思へども、しらせて云はれぬ暇を、奥へいふ顔鞠場へさし當て、清姫「申しく、もうお暇申します。不思議な縁で雙六の、簀目合せてお嬉しや。互に四の二と打つた目を、必々お忘れなされな、田舎娘は氣が堅い、外の女と乞目と聞くと、六さき塞いで動かさぬ。熊野參にお宿して、又の逢ふ日を待ちます。お名残をしの別れや」と、涙まじり

の暇乞、心づきしか母親は、母いつ迄いうても名残は盡きぬ。暮るに近い、サアおぢや」と、無理に引立て押立てよ、歸る時節のよき折羽、娘は重一打出せし、其甲斐もなうすごくくと。胸は涙のさよ波や、しがを隠して立歸る、跡より安珍走り出で、安珍「其志いつ迄も忘れはおかぬ。約束の熊野參の度毎に、逢ふを互の樂みと、思うて暮して居てたも」と、影見ゆる迄獨言、後は涙の別れ水、岩にせかれし思ひなり。かゝる折節奥よりも、足音高く二人の妹、互に一腰ほつ込で、諍ひかけくる音に驚き、安珍やがて立塞がり、安珍「コリヤけたましや何事」と、尋に八重垣、「コレ兄さん、今舅濱成様の仰には、其方達が親參議百川、かねて皇子と心を合せ、親王様を奪ひ土の牢に押込置く、いはど朝敵の娘、藏人にも就嫁にも添はして置かれず、夫の代りに暇をやる。若何れでも、親王を奪ひかへさば其時嫁、さもなくば是切と、暇の印の此一腰、親の内へかけ込んで、有無を糺す、其處退いて」と、行かんとすれば、安珍「ヤレ待て兩人、さう息切で纏出しても、六里七里の道の法、走り通しに成りもせまい、心を鎮め兄がいふ事一通り聞いてくれ。最前物陰にて聞けば、安よしこそ、親百川と一味して、寶劔を奪ひ逐電せしと、難題を受けたれども、言譯せうにも出られぬ仕儀、所詮某に成りかはり、親と一味でない言譯、濱成卿へ俱に取成してくれまいか」と、いふ内よりも二人の妹、「お笑止なれども、

其言譯して上げまする暇がない。邪魔せずとも其處退いたく」安珍「ナ、尤なれども兄弟の誼み、頼む」といふを妹の檜垣、「イヤ兄さん、一味でないといふ證據、何をもつて何でなさるよ」安珍「サアそれは」檜垣「ナント」はつと安珍胸は板、詮方もなく妹が脇指、ぬき取り自害と見えければ、二人驚き縋りとめ、妹二人詞荒いは銘々が身の上が切なさ、お果なされて言譯が立つかいなう」と取付て、泣しほるれば、ともに目をすり、安珍言譯せうにも證據はなし。濱成公の疑は、則ち天子の御不審、是晴さいでは生きても死んでもせめて御恩に腹掻き切り、安珍が曇なき胸の鏡をお目にかける。退いてくれ、放してくれ」と、押退け突退けあらそふ體を濱成卿、見るより駈出で中を引きわけ、濱成「ヤア、安珍、まこと親と一味でなくば、コリヤ是を蹴れ。是こそは汝が親の首成るぞ」と、而體書いたる鞠さし出し、「君は天なり親は地なり。天につくや、地につくや、心底見たし」と件の鞠、突き付け給へば安珍はつと、是ぞ正しく父の顔、悪人なれど勿體なし、如何と心は七轉八倒、濱成猶豫は一味か、君を捨つるか。主の爲には親の首、性根を据ゑてサア蹴れ」と、催促せられ苦しさ切なさ、八逆五逆の罪受けても、十善天子へ御味方、免させ給へ親人と、走りかよつてはつしりと、蹴上る鞠の手を引れ、尻居にどうど。濱成「出来した安珍、蹴るに及ばぬ疑晴れた。後日に參内取次致さん。嫁達兩

人早くお往きやれ」「はつ」と答て八重垣檜垣、「兄さんさらばと云捨て、飛がごとくに、三重。

道行 塗分鞘

秋の露、こほれやすきに月は澄む、誓ひし人も徒に、世に住みながらまよならぬ、夫にもあはず、舅御に、去られて人目恥かしの、森の鳥と諸共に、飛鳥の里を立出づる、姉の八重垣妹の、檜垣も俱に一腰を、見るも恨めし、暇の印、朱鞘黒鞘ぬり分けて、望は一つ二上の、山を見捨てて行くさきは、八重九重や古郷の空、春日の里へ迷ひ行く、情なき身の、父とへば、悪人として世の人に、しがをいはせの森つゞき、天の香具山隠れなき、衣ほしける御製も有る、其御方も姫御前の、幾夜を假の旅枕、つひに女帝と成り給ひ、袖振る山の滴も、凝固りて御子をば、清見が原にて生み給ふ、其御産屋を啼澤と、嶋立澤も及びなき、夕暮ごとに来て見たや、見せたや栗毛、駒の岡、「叶堂とは吉左右のよいではないか姉さん」と、勇み進んで見せければ、「愚の事をいふ人や、親王様を奪ふとは、其方や私が女の身で、根深い父の巧のもと、どう取返して歸られう、頼に思ふ母様も、他戸の皇子へ縁深し、願ひ叶はさどうせうぞ」「ナウ其案じは館をば、出る時よりかた心、母様頼み叶はずば、直に其場が最期ぞと、思ひあきらめ給はれ」

と、手に手を取りて兄弟が、歎く涙は秋篠や、外山の里に時雨して、幾田川にや流すらん。流に慕ひ水に沿ひ、夫と夫との心根を、どうした縁に氏神の、儘にもならぬ事かいな。肱を枕に假寐の夢も、鴛鴦の思ひは離れじと、二世を結びし男帯、外にわる氣は有まいけれど、悪所らしいがなんよへ、思ひつゞけて行先は、杖突の里高山の、八幡宮の御社、遙に拜し親達の、心柔らぎ我が、願ひも叶ひ妹と背の、縁を結ばせ給はれと、祈る印を松尾寺、佛の御足残されし、佛足石は是とかや。敵にあうては勝間田の、池の彼方は生駒山、入日にうつる紅の、秋の照葉が風含み、はらりはらくちらくと、飛ぶは小蝶か小雀か、いや木の葉ぞや、楨の原、西の大寺招提寺、暮れぬ内にと道急けば、行きかふ人の口の端に、なんほ其様にせきやつても、願ひかなよと思やつても、命にかけてと思やつても、日本に一人の大事の夫、思ひ切る事ならぬぞと、謳ふ唱歌は戀なれど、二人が身には大安寺、ア、まよよ眞野の里、賣間の池も水越えて、哀浮世に川がな二瀬、思ひ切る瀬と切らぬ瀬と、いふもつらさのます鏡、野守の池も、早過ぎて、奈良の京へぞ三重急ぎ行く。諸鳥は高山を高しとせずして、高木に巢を造る、参議藤原の百川は親王を奪ひしより、己が館を二重三重、八重九重の御末をば、洞穴に押込しと、聞くに宮方せんかたも、なき名を呼で毒蟲の、苦百川と云ひ囃す。其張本の斑猫は、御腹替の兄宮他戸の皇

子、俄の入來は穩便の、御沙汰有りとの知せによつて、出迎ふ女は幾瀬とて、元は皇子へ乳を上けて、誼も深く今の身は、參議の家の御臺とも、奥と口との間の間に、五十の花の闌をば、衣紋繕ひ待受ける、二品式部卿他戸の皇子、胤は王位の御末でも、賤しき腹の乳を受けて、邪智に固まる嚴つの相、濁尖として入り給へば、重くもてなし上座へ通し、幾瀬、夫は聖天の行にこもり、饗應遅はるにより取敢へず自がお迎ひ、俄の御光駕心元なし」と申上ぐれば、他戸の皇子、皇子、ホ、珍しや幾瀬、其方事は麿に乳房をあたへ、傳り育てたる誼を思ひ切々の意見状、役にたよねど奇特々々、此度父天皇の愛子、山の部の親王を奪ひ土の牢におし込めし由、百川が忠節是も奇特、誠に彼奴は、弟ながら后腹とてもつちやうし、我は母方いやしきとて、兄ながら位を省かれ、既に弟へ即位あらんとせしを、寶劍の見えざると、百川が四十餘日眠らぬ眼に睨み立てられ、其場を延した父天皇、たやすく位を譲らうや。山の部さへ殺すれば厭でも位は麿が物、いで捻り殺してくれんず」と、行かんとするを引止めて、幾瀬、コレ申し、乳母が悪い事は申さぬ、お心を持直し天皇様へ御孝行、諸人を憐み給ひなば、此乳母が念願でもお前を位につけねばおかぬ、何の因果で其様に、短氣にお生れなされたぞ」と、泣いては諫め諫めては、涙を拂ふ眞實の、母にまさりし教訓に、遺の皇子も進み得ず、暫し佇みおはせしが、

皇子「ホウ是迄某に對し左程の事いふ者あらず、遣は皇子が乳の親出來たく。其方が詞に隨ひ、我手にはかけまじ。何事も百川に任さん、何處に居る對面せん」と、振切り奥へ入り給へば、幾瀬「ナウ其夫が猶不詳なし、逢はずとお歸り遊せ」と、いふ間も隔つ襖戸の、陰に御臺は佇みて、案じに胸をいため居る。折から來る二人の娘、願望が叶はずば、俱に死なんと言合す、心細さと悲しさと、此身は何と奈良の京、春日の里に立歸る。それと見るより母の幾瀬、幾瀬「ヤレ珍しの兄弟や、いざ先是へ」とあしらひに、心せきたつ用無心、云出しかねしを妹の檜垣、檜垣「申し姊さん、何かの咄をさし置いて、今の願ひの一通り言出してお覽じませ」八重垣「マアこなたから」檜垣「イヤお前」と、互の辭儀も物らしく、心おかれて、幾瀬「ハテ改まつた二人の挨拶、聲殿達や舅御の機嫌はよいか變らずか」と、問も案じの一つかや。姊の八重垣打萎れ、八重垣「其機嫌の悪いに付き、兄弟ともに舅去、追出されて歸りし」と聞いて悔り、幾瀬「ソリヤどうして、何仕損」と詞の中より妹の檜垣、檜垣「コレ母様、仕損じは父の邪、皇子様と一味して親王様を囚にし、押込有ると聞き及び、兄弟の内何方でも、奪かへして來らば嫁、さもなくば是限りと夫々の留守ともいはず、濱成様の舅去、邪な爺様に言うたとて聞き入れは有るまい、どうぞお前の了簡で、親王様を自へお渡しなされて下さんせ」と、頼めば姊も俱々に、八重垣「妹は格

別私べつわたしは姉あねがひ、つい漏もらかして下くださんせ」と、いふ内うちよりも、檜垣ひのき「コレ姉あねさん、妹いもは格別かくべつ姉あねがひといソリヤ身勝手みがってな仰おつしやり方かた、お前まへばかりが受取うけとつて此方こつちには鼻はなあき手振てぶりで去いなうか」八重垣やえ「イヤ妹いも、親王様おみを受取うけとつても其方そなたへは得渡あわたさぬ」檜垣ひのき「ソリヤ何故なぜな」八重垣やえ「ハテ知れた事こと、此方こなたの連合つれあひ鷹塚殿たかづかどのは、皇子様わうじさまの御附人おつけびと、其女房そのにようぼう若宮わかみやを渡わたして自ら夫みづかへ立たうか」檜垣ひのき「イヤそりや以ては同じ事おなじこと、御大切ごたいせつな親王様おみを奪うばはるゝ様な侍さむらいの、お内義ないぎさんは得えやるまい、母様私かみさまにしに」「イヤ俺おれに」と、諍あそひせがめば母親ははおやは、辛つらさ果はなく突つきのけく、幾瀬幾瀬「ヤイ其處そこな白癡うつそりども、まだ遣やらうとも遣やるまいとも、言いはぬ内うちから我物喧嘩わがものけんわは、ホ、ホ、ホ、をかしやく、奥おくに皇子わうじもお入いりなり、連合つれあひの居間ゐまも近いちか、疾さつとと去いんだらよからう。思おもひも寄よらぬ頼たのみや」と取とつてもつかぬ心根こころねの、底意そこいも知らず妹いもの檜垣ひのき、檜垣ひのき「そんなら願ねがひは叶かなはぬかへ」幾瀬幾瀬「くどいく」檜垣ひのき「へエ、もう是非ひがござんせぬ。コレ姉あねさん、願ねがひはざ此脇指このわきざし、暇しるしの印いんが命いのちの暇しるしの印いんぞと、云い合せたは爰こゝの事こと、用意よういしてサア、ごんせ」と、立たちあげれば、八重垣やえ「チ、それよ、無情つれない親おやの目めの前まへで潔いさめよう、サアおぢや」と、互たがひに白刃しらばを抜放ぬきはなし差違さしちがへんとする所に、百川ももがは「ヤレ待まて兩人りやうにん、親王おみを渡わたしてくれう、早はやまるな」と聲こゑかけ出るは父ちちの百川ももがは、「エ、そりや本ほんか真まことか」と、悦えぶ二人ふたりが傍かたはらに立たち寄り、拔身ぬきみを捲取まきとりえせ笑わひ、百川ももがは「舅濱成しゅうまはなりが子こに迷まよふ親心おやこころと、己おのが性根しやうねに引ひき較くらべ、云いひ付け越こしたは、ハ

ハ、小賢しき謀、憎しと思へど親王を、渡して二人に悦さう「八重垣」アイくく有難う
 て嬉うてナウ妹、それく父の恩は須彌山より高いといなあ、母の恩は泉水より浅いといなう、
 親持つならば爺親と、追従うて勇みるる。百川「ヲ、悦ぶ體を見て我も満足、シテ親王を受取
 るに、兄弟互に諍ふ體、姉へ渡さば妹が恨み、妹へやらば姉が恨まん、互の異論も氣の毒なれば、
 父が一つの計ひ有り」と、持たる拔身を二腰さし出し、百川「こりや此姉が刃物を鞘へをさめて
 見よ。又妹が此拔身を、姉が鞘へ、納めて見よ、かう後家寡と振違はせ、渡す劔が何方でも填
 つた方へ親王わたそ、鯉口に瑕付けな、きつと申渡したぞ」と、刃物を投げ付け女房を、引立
 て一間へ入りにけり。許に兄弟、何の氣も、つかくよつて拔身を取上げ、楡垣「姉さんはち
 やちな謎、お前も脇指私も脇指、身が替つたとて合そな物。何方もこつほりはまつたら、結句
 に跡でをかしかろ、サアごんせはめて見よ。抜た時よりさす時があぶない物」と兄弟が、さいて
 見れども平身と細身、反の違か切先のあたるは芥か埃かと、抜いて叩いて吹いては覗き、八重垣「妹
 どうぢやはまつたか 楡垣「アイ大方でアア三寸、鞘の響が細いかして、間へた様で鹽梅悪い」
 八重垣「サア私のがのも一寸だけ、切先折るとついはいまる、後家鞘でも、ヲ、辛氣、又詰つた」と振
 廻し、捻廻して思はずも、ふつと吹出す許なり、八重垣「コレ妹笑ふ程猶さよれぬ、其方も私も公家

育、手馴ぬ刃物の謎かけられ、はまらぬ時は何とせう」檢垣「ハテ氣の弱ひ、はまらざ無理にし込むか、叩き込んで間を合そ」八重垣「ホンニいつそ叩き込も、それもよかる」と縁先の、柱をあてと立かよるを、襖を明けて母の幾瀬、「ヤレまで兄弟、はまらぬ身をば無理やりに、叩き込むと鞘がわれる、まつ其ごとく兄弟が、無理に宮様貫をというと、親王様のお命の、鞘がわれるが合點か」二人「ヒエイ」幾瀬「それ知たゆゑ、自らが、ならぬといふを恨みつらみ、あまい爺御の渡そと有るは、御首打つて渡す氣と、知らぬ二人の愚さよ、忠が不忠となる時は、猶も勇に見限られ、夫婦の縁も絶果てん、合點の悪い娘や」と、教訓せられ兄弟は、合點しながら立歸り、何んと云はうぞ如何せうぞと、案じに胸も痛むる折から、庭の繁の内よりも、藏人「ヤア、女、眞忠義の心ならば、其親鮫を打割つて、親王を受取れ」と、聲かけ出るを、八重垣「ヤア我夫の藏人様か」と、姉が叫べば妹も俱に、檢垣「どうしてあれにはお忍び」と、尋ねよれば上張脱捨て、藏人「某親王を奪はれしより、皇子廣純が館其外、心懸の御館を尋廻るに、思ひの外百川の業と聞き、十日餘りも窺へども、門戸厳しく、忍び入らん便なく、今朝曉轟の細川より漸と忍び込み、繁みに隠れて最前より仔細はとつくと聞届けた、後楯には此藏人、親鮫割つて受取らずば、親王のお命危し、但しは親を庇ふか」と、制せられて兄弟はつと、「實惡人の父の首

討つて言譯、妹合點か「ヲ、合點」と身繕ひ、駈け行く所を母親が、向ふへ廻つて、幾瀬待つた待つた、今奥には他戸の皇子、夫百川評議の最中、それと悟らば親王を、害せんも計らず、今夜八聲の鳥を相圖、手引を爲うが何と智殿、思案して待つ氣はないか。大事の前の小事ぢやが」と、さし止られて藏人も、藏人「いか様時分は悪しからん、必ず夜更けて奪はず氣か」八重垣「母様手引あそばすか」幾瀬「シイ聲が高い」然らば後程、合點」と、點頭き囁き、三人は、間遠に隔つ勝手口、母は此方の一問へと、引別れてぞ歩行く。痛はしや親王は、急難のがれ走り出で、逃もやせん、隠れやせんと狼狽へ給ふを、主の百川見付けてかけ出で、取て引据る觀念あれ」と拔放す、手本へ駈くる妻の幾瀬、「ナウ是待つて」と中に隔り、幾瀬「尤皇子を御位に付けたうは思へども、親王様を殺すとは、思ひも寄らぬ惡逆、早まつて下さるな」と覆ひになれば取つて突退け、百川「ヤア狼狽者、其皇子の御位の、妨となる此親王、今殺さぬと藏人夫婦、奪取らんと忍入り、汝を手引の相圖も知つたり、手早く首を討落し、智や娘に鼻あかす」と、立ちまふ後へ二人の娘、和氣藏人窺寄り、「大悪人め」と拔打に、はつしと斬れば、丁と受けたる百川が、躡ほふ所を疊みかけ、「冥加知らずの國賊め」と、ふり上げる太刀の下、手向ひせじと刃物拔出し、百川「ヤレまで藏人いふ事あり、誠それなる親王は、種腹卑しき質物ぞ」と、いふに悔

り人々は、血迷うてか、狼狽て、狂氣したかと臆人も、忙れて顔をさし覗く。百川「ホ、斯うばかりでは合點行くまじ。何を隠さうあの山の部の親王といふは、某が妾腹の勅」藏人「ヤア、」百川「年をいへば十四年以前、后御男子を御誕生、御悦び限りなき所に、七夜の内に雲隠し給ひ、密に帝へ奏せし所、后女が産後の歎きも不便、參議以上の子があらば、入替へおけとの論言、折ふし某がめかけし女男子を産む、先當分の涙押へと思ひ差上置きしが、爰をおきよやれ、鷹が鷹として生れ上り、后女は元より天皇の御寵愛、餘て零ると窃の勅には、他戸の皇子は惡黨故、位に即けては民の歎き、汝が勅と人知らぬこそ幸、山の部の親王に位を譲らんと、有難過ぎて恐しき詔、ぞんじもよらず、兎角く皇子へ御位と、四十餘日眼をさらせど、天皇許容ましまさず、所詮勅を討つて捨て、腹搔き切て御位の、評議を一圖に定めさせんと、覺悟極めて斯の仕合、死後に頼むは皇子の事、惡黨といへども、皆廣純がなす業、御意見を加へ、天子の位につけて給へ。正しき胤はあなた一人、我子は果報に道過ぎて、不便な最後を遂さする、ヤレ女房をこ退け」と、心強も突立つて、拔身引提げ立かよる、皇子「ヤレまで殺すなしばしく」と聲かけて、立出給ふ他戸の皇子、面をつくる柔和の相、御詞も穩に、皇子「扱は親王は汝が勅よな。鷹を位に即けん爲、殺さんとは過分々々。さすれば天子の御胤なく、我ならで御位を

つぐ者なし。是迄の積悪改めん、父天皇へ奏聞し、早く位につく様に、汝等宜計ひくれよ。善心に立返りし證據には、渡す物有り是見よ」と、御懷中より錦の袋、皇子「コリヤ是こそは、紛失せし。三種の寶の内十握の寶劍、是を戻すからは、父天皇も疑有まじ、急いで即位の奏聞せよ」と、渡し給へば百川が、膝行して押載き、取納むれば妻の幾瀬、「天下の父母と成るお方の、お生性はそれ程に、打つて變る物かいの、乳母が育たお子程有る」と、悦び勇めば二人の娘、御代は長久々々と、藏人共に祝しける。百川勇んで、「一時も早く御歸館、それく御迎の官人」と呼立つれば、皇子も歡喜の色顯し、皇子「是より鷹が心をかけし錦の前を尋出し、后となして樂まん。旁祝義」と云ひ殘し、還御あれば人々は、俱に千秋萬歳の聲で見送り奉る。親王跡に身の上を、聞いて悲しや恥かしやと、有合ふ脇指おつ取つて自害と見えしを、百川慌て刃物拵ぎ取り、上座へ直して聲張り上げ、百川御位讓は山の部親王、御即位成るぞ」と呼はるにぞ、藏人驚き、藏人「ヤア手の裏返す一言、汝が躬へ即位とは、逆心成るか」といはせも立たず、百川「ホ、誠は此寶劍を取返さん爲様々と計略、正しく皇子が隠し給ひしと見込たれども、取りかへすべき術もなく、親王まで奪取つて見すれども、中々寶劍は出し給はず、悪人でも賢きに、ほつと困り、親王を我子と偽り殺さんとせば、外に太子の無きに安堵し、出し給はる

事も有らうかと、廻遠き計略も、君の聖徳厚きにより、まんまと奪返したり、皇子の發氣も本心ならず、數萬の軍勢集め給へば、かく謀し事、洩ては忽天下の亂、祕すべしく一大事、サア何方も此聖天の間へ金打」と、勸に従ひ藏人夫婦、檜垣も俱に神罰明罰、洩さば受けんと誓の詞、何思ひけん女房幾瀬、有合ふ刃物追取つて、ぐつとさし込む心下、ナウ悲しや」と二人の娘、走り寄れば藏人も、「コハ何ゆゑ」と驅けよるを、「ヤレ寄るまい」と手負は起立ち、幾瀬「何故とは自は、現在皇子のお乳めのと、洩さで義理が立つべきか、彼方の影で此家へ嫁入、御臺様よ、奥様よと敬れるも皆御恩、其恩忘れ大切な、御身のひしに成る事を洩すまいとの金打が、どう成る物ぞ我夫、たとへ提婆を育てても、乳母たる者の習にて、養君が悪いとも、思はぬ癖に氣も僻み、后のお子に負けさせまい、二番と下けまい御位に、即うくと稚より、我慢我慢で育てたる、附子の鳥の科人は、自にてさむらふぞや。お腹の内から悪人の、氣質も備り給ふまい、御意見加へ我夫、親王様の後見とも、お願ひなされて下され」と、思ひ餘りし涙の體詮方もなく見えければ、藏人差寄り、藏人「チ、天晴貞女。是非なく最期いとしや」と、目を摺りこすれば二人の娘、娘二人「皇子様も天子のお胤お心さへ直らうなら、何の如才がござんせう。何にも心に思はずとも、稱名唱へて下さんせ。私等二人が身の上も、苦にせずとも」

と云ひさして、はつとばかりに泣きしづむ。手負は猶もしやくり上げ、幾瀬、子に別行く親の身が、どう苦にせず死れうぞ、分て迷ひは安珍事、親の勘當流浪して、長の旅路の熊野道、今に通ふか参るかと、夜は終夜案じ寐の、枕より外我涙、泣けど知るもの無きごとよ、せめて未來の手向には勘當赦して下され」と、頼む詞の息遣ひ消入る如く見えたれば、百川悲歎の涙ながら、百川「元勘當も常座の計略、追付け赦して呼返さん、必々心にかきな。皇子へ因縁の深き身は、外より洩れても疑かよる、生きて其罪受けうより、出来した覺悟をよう極めた、極樂淨土の導は、六字の名號忘れな」と、勧るに功德俱々に、唱へとなふる南無阿彌陀、佛の一字に息止り、眼が如く絶え果たり。「ナウ是しはしと二人の娘、緋る甲斐なく兩人も、涙に咽ふ折柄に、表に響く攻太鼓、鬨をどつとぞ上げにける。はつと人々歎をとめ、「コハ何者」と見る所に、右大辨紀廣純、馬上に跨り手綱搔繰り、廣純「ヤア心得ぬ百川、今日内裏を炎上し、天皇を尋ねる所に在所知れず、扱は汝が隠したに極つたり、其上最前皇子を賺し寶劔を奪取つたるは、正しく一心、急いで寶劔天皇を渡せ、異議に及ぶとコリヤ是を見よ。神代より傳はる、日月の簾眼前に引裂き捨て、官兵集る便を切らや。如何にく」と御簾をば、兩手に引張見せかけたり。百川「ヤレそれ裂は天下の凶事、天命をしれ廣純」と、いへども聞かず、廣純「ナニ天命、あたる罰は汝等が身の上

返答せいサアどうぢや」と、引裂かねぬ面魂。詮方つきて見えたる所に、山の部の親王は、長押
にかけし弓矢おつ取り、切て放せば誤たず、廣純が大推より咽吭かけて射落され、眞逆に落るを、
藏人かけよつて、首打落し御旗を奪ひ、藏人コレく百川殿、天皇玉座にましまさぬと、廣純
が一言心許なし、イデ御行方を尋ねんと、驅出すを、百川ヤア待て藏人、玉體危く某が、夜
前密に、愚妻にも隠し忍せ奉る。御尊顔を拜せよ」と、聖天の襖戸さつと開けば、御簾卷上げて
御父天皇高座に悠々と、四方に立たる御旗は、立武朱雀青龍白虎、風に翻翻人々は、魂恟
り翻り、はつとばかりに平伏す。天皇御聲麗はしく、天鳥絶えて久しき寶劍を、奪返せし百川が
計略感するに餘り有り。妻の最期山の部が弓勢、驚き入りし」と詔り、親王はつと奏て曰く、親王
「今廣純が禁庭を放火せしと申すは重疊、元此國は、四神相應の地にあらず、急ぎ都を山城に
御遷し候へかし。それ山州遷都の地は、南北行程百里に餘り、山河四方に麗はしく、此地に新都
を造營し、皇居と定むる物ならば、敵の恐も候まじ、山の部の親王が小智の願ひに候」と、年に似
合ぬ江帥名智、けに理りや此親王奈良の都を今の京、平安城へ遷れし桓武天皇、是とかや。心
任と勅下り遷都の土地の御祓せんと、文武の旗をおつ取りて進み給へば藏人は朱雀の旗を、預
りて八重垣、檜垣青龍白虎、てん手に携へ御供に、月の都を立出づる、日の御神の御末人、

御子見送り賜は、六十餘州を御餞別、娘二人は母親の死骸を殘し稱名を、胸に唱へて未來へ餞別、行は神道戻るは佛道、中を隔つる藏人は、忠義の道の道直に、先長岡の花の地へ、宮を、供奉して立出づる。

第四

義士は交りを絶つとも惡聲を出さず、忠臣は國を去れども、舊恩を忘れずとかや。名にし熊野の山疊む、室の郡に富榮え、世々に續し眞子の家、新左衛門の尉俊綱、美若の比は公に仕へし身の、父庄司歿して後、二度館に歸り花、幾春秋を置く霜の、老母に孝行妹を寵み、主持ぬ身は野邊の雲、心は塵の亂なく、寢覺を樂と暮せしが、近會より妹の清姫が病氣とて、館の内は密々と、娘どもが立ちかはり入替り、爰を煎湯とりくくに量る水さへ澄かへり、ついの物音あしおど、心も、心を付て立ち振舞ふ、家の行義ぞ格別なる。實病女より見る母の傍で氣遣安からず、娘をつれて一間よりしづくくと立出て、母ナウ清姫、心持はちとよいか、百病も氣からと、寢てばかり居やる程痞も下らず、齒の痛も募る道理庭に折咲く花をも眺め、皆の者が世間咄聞くも慰則ち養生、心を晴しや」と有りければ、清姫イヤなう母様氣遣うて下さりますな、私が此病に

は、慰なぐさより藥くすりよりよい事があれども、それがどうも儘ままならぬ」母「マアよい事とは」譯題「サレバイ
ナいつもお宿を申します熊野行者のお山伏、安珍様あんじんさまが覺おぼえてござる、奇妙きまうな加持かぢを頼たのだら早速さつそくに
直ただらう物、どうしてお出いでなされぬぞい」母「サア此人このひとは熊野權現くまのごんげんへ、三十三度の願ねが有あるとて毎月毎月參
詣けい、此方こなたを定宿ぢやうしやくに頼たのみ、最早もはや今一度で願ねがも満みると云はしやつたに、何なんとしてか跡月あとげつも見えなんだ
は、若氣色もしきしやくでも悪わるいか、便せうにも確乎しつぷりと所は知らず」譯題「サア其所そのところを知しつたらば私がわしがつい尋
ていて、此病このびやうも直ただして貰もらひ御無事ごみじな様子ようすを直ただに見て案あんずる胸むねが休やすめたい」と、思おもひ積つもり戀病こひやまを、
包つみに餘あまる詞ことばの端はし、母は悟さとれどそ知らぬ顔、母「ソレそのやうく其様そのやうに深こう苦くにせいでもよい事を、假初かりそめ
にもくしくと物思ものおもやる故ゆゑ、齒はの痛いたみも一倍強いっばいい。昨日きのふも齒醫者はいししやの元隆げんりゆう様さまが様子ようすを見て、どうで此
齒はは一枚まいい抜ぬかねば治なほるまいと云はしやつた。今いまにも見えたら意地いぢむぢ云はすと拔ぬけもらや」譯題
「チ、母様の譯わけもない事言はしやんせ、大事だいじの揃そろうた此齒はをぬいてよい物か、あた見苦みぐるしい恥
かしい、そんな事假かりにも云いうて下くださんすな」母「ハテでも病やまひの直ただる事、醫者いしや殿どのが悪い事ことは仰おつしや
るまい」譯題「アレまだいの、私わしなんほでも拔事ぬくこといや。聞きもうるさい面倒めんどう」と、生付うまつたるやう腹立はらたち、
顔かほを振袖ふりそでびんしやんと、寢所しんじよにこそは入りにけり。跡打眺あとうちながめ母親はやおやは氣きの毒顔どくがほに、母「テモ扱かも片
意地いぢな者では有あるぞ。とは云ふものの若時わかいときは誰たれしも有ある事、十六七になると早前後見まへうしろて、よい

上にもたしなむ最中、厭といふも無理ではない」と、了簡付ける親心分別なきは習慣なり。折節つかく入り来るは、齒醫者大橋元隆、母「コレハく御苦勞にようこそお出で。妯ども煙草盆お茶持てこい」元隆「イヤ何もお構なざるよな。扱昨日もちよと申す通り、惣じて三十三枚齒を生ぜし女は、必ず物妬強く執著深きと、世上の噂に申す如く、娘御の病氣は物思ひより起つて、齒を痛め瘰癧氣を上せば、逆も本有の藥は浴せても驗はない筈、兎角あの齒を一枚ぬけば、忽病氣の根を絶ども、ぬかす事は扱置悍馬のはねる様に、ぴんくしやんく寄付けぬには困り物、今日はどうぞ騙かけ、抜て進ぜる工面がござらう」母「サア今もそれを申す事、お世話ながら何とぞ御療治頼上げます、いざ先奥へお通り」と、伴ひ皆々入りにけり。時しも一間の障子押明け、あるじ新左衛門尉俊綱、調へ置きし長持の蓋押開き、錦の前を出し參らせ、新左「不思議に奈良の町の道具屋にて此長持を買取り御目にかよるも主従の奇縁、大切の御身なれば家内の者にも深く包み、長々御窮屈なる御住居察しやられて痛はしよ。暫く是にて御氣を晴させ給へ」と、恭しく手をつけば、錦の前は世を忍び日影見ぬ目の面瘦て、麗かならぬ聲をひそめ、錦の前昔の誼を忘れず、身にかへて段々の介抱、何時の世に忘れうぞ。惜からぬ自が命永へて、憂目をしのぐも夫故、此上ながら、何とぞ安珍様の行方を尋ね二度廻あふ様に頼む」とばかり打しをれ、跡

は涙にあやどなき。新左「コレハく又よしなき事仰出されて御歎き、それでは猶お氣の痛となる御病氣が出ます。誠に某、御館に勤しは若年の時、親庄司相果て家を繼ぐべき者なれば、暇を申し此所へ歸りしが、其後御父道成公には御遁世遊し、叔御廣純卿御家督相續ありて、此度皇子の謀反に組し剩へ、姫君を差上げんと、某館に有るならば、かく御流浪はさせませぬに、性根据りし御家來なき故、國土の亂れ御身の御難儀残念さよ去りながら、御云號の安珍公、尋出して御夫婦となし二度御代に出すべし。御心安く思召せ」と世に頼もしき詞の末、錦の前ヲ、兎にも角にも其方を力、よきに頼む」と仰の内、表へ人音、はつと驚き、先御忍と一間の障子、ひつしやり引立て勝手へ出づれば、熊野行者の獨旅、通ひ馴たる山伏姿、安珍は定宿に案内もいらす笠取つて、によつとはいれば新左衛門、新左「テモ珍しや安珍、面妖毎月見える人が何としてか二月餘も參詣ないは、若氣色でも悪いかと、家内が毎日云ひ出し氣遣ひ致て居た」安珍「コレハ扱御親切、忝い。我等も今度か三十三度の參り納め、大願成就いたせば是程嬉しい事はござらぬ。又何時もながらお宿の御無心頼まする」と草鞋の紐、解間おそしと錦の前、聲聞付けて走出で、錦の前「ナウなつかしの安珍様、お前に逢はん爲ばかり、館を抜出で彼方此方と流浪の内、不思議に此家へ廻り來て、新左衛門の世話に成り、お目にかよるも盡せぬ縁、

御無事なお顔を見参らせ嬉き中にも安からぬ、修行の旅の御艱難痛し「さよ」とばかりにて、思ひこがれし溜涙すがり付いて泣き給ふ。安珍「ヲ、我とても添ねばならぬおことの身の上、心には懸かれども誰に尋ねん便もなし、先新左衛門の世話とあれば祝著々々、シテ此家へは何として來られしぞ」新左衛門「イヤそのお咄は新左衛門が追て申上げん。扱はお前が少将安珍様かや。いか様某以前道成公に仕し時見覺し面差、御父百川公に其儘、存ぜぬ事とて是迄平懐に申せし段眞平御免、此上は御兩所ともに我家に忍せ奉り、時節をうかどひ御代に出さんさりながら、皇子の方より姫君の有所、草を分けて尋ぬる由、壁に耳有り爰は端近、姫君は一間へお出で、安珍様は旅の垢付風呂に召し御休足、いざ此方へ」と勝手口、伴ひてこそ入りにけり。元隆「いやもうお暇申します、それにござれ」と中の間の、襖押明け立ち出づる大橋元隆、奴の白菊がおくり出づれば、元隆「コレ女中、又今日も素手ふつて戻ります、去りとは片意地な娘御、お袋が甘みからやんちやいうて齒をぬかさぬは」白菊「サア私等なら術ない目をせうより、つい抜てもらひませうに」元隆「ヲ、それく、惣體齒には限らぬ、十六七の血氣盛、ぬく時分に堪忍すれば、陰氣が凝て病に成る。其處を直すは此元隆が得物、何時でも頼しやれ、ついちよこくと抜てやる。ハア南無三寶、ぬけいでも大事な、履物の鼻緒がすつほり、コレちよつと借ります」

と、雪踏かたしに拔捨し草鞋引きかけたち歸る。白菊は跡見送り、奥へ入らんとする所へ、ばつたばつたと登は、何事やらんと驚く内、安珍の胸倉取り引き立ち出づる清姫が、急に急いたる恨のしやな聲、清姫「コレ大嘘つき人でなし、エツエお前はの、此美しい顔をして、ようもようもぬけく」と騙された事ぢや、ヤレ私とお前が約束は假初の事ぢやない。抑大和の壺坂寺、茶屋の床机で互に見初しより、鞠場の中の云堅め、それより月々の熊野詣に、此家が定宿馴染程思ひも増り、母様や兄様に譯咄して、早う夫婦に成りたいといへば、まちつと待て、三十三度も今暫く大願成就した上では、女房に持う、一生添はうと、日本の神佛を誓ひに立て、外の女子は目もかけまいと、コレ此口で云はしやんしたぢやないか。それに何ぢや、錦の前に添はねばならぬと、濃てりとした挨拶、すりや彼方からも厭らしい、お前に逢ふ爲ばかり、館を抜たの走つたのと、あた舌たるいしこなし振、あんな女房持ちながら、なぜ騙しやつた、たらしやつた、今迄命も絶る程、思ひこがれた此胸を、元の通りに直して貰を。償うて返しや」と武者振付き、抓りつ叩いつ罫に、齒形喰ひ入る戀の意地、身を顛はして泣き叫ぶ。安珍ほつと持あぐみ、安珍「今の様子を聞かしては、成程腹立尤もさりながら、全く其方を偽りたらず所存でなし、錦の前は稚き時より、勅説を以て親々が云號け、一度添はねば父百川は、違勅の科に落つ

る事、黙し難き一大事、たとへ夫婦の語をなすとも、アリヤ畢竟立物、其方を思ふは眞實の戀路」清姫「ア、是言ふまい、そんな間合聞く耳持たぬ。たとへそれが誠でも、假にも煩さい女房穿鑿、外の女子にお前の顔、見せる事も嫌ぢや、厭ぢや。今日の前で錦の前と縁切て下さんせ」安珍「ハテ扱それは聞譯ない。マア氣を鎮めて」清姫「イヤくくく聞ぬく」と競あふ聲。聞かねて母立出で、母「コレく、娘はしたない、そりや何事、マア爰放しや」と引分けて、母「如終は彼處で聞きました。安珍様の餘儀ない言譯、聞入れぬは片意地と云はうか、我儘千萬嗜みやく」清姫「イヤお前までが其様に、叱しやんすりや猶腹が立つ、私が無理か片意地か、打明けていふ聞かしやせん」安珍「ア、是お袋、それでは結句氣が逆立つ、却つて此安珍が難儀に成る」母「イヤ大事ござりませぬ、お前が爰にござつては、物に遠慮が有つて悪い、構はずと奥へござれ。後で合點の行様に、母がとつくと申ましょ、サアく「お出」と押やられ、安珍「然らば宜う頼入る。コレ清姫、たつた今も言通り何々の誓文、其方を騙さう様はない、堅い約束未來までも違はぬ程に、必短氣起しやんな」と、いひつゝ立つて後や先、思ひ廻して氣の毒さ、しほくとして入り給ふ。母は娘の膝に摺寄り、母「親甲斐に無理無體叩き付ると思はずとも、物の道理を合點しや。安珍様は誰有ふ。參議百川様の御子息と、聞いて驚く其上に、姫君は新左衛門が以前のお主と

あれば、母や其方も俱々に、恐敬ふお身の上、其方に縁切らそとは、慮外といはうか、勿體ないといはうか、道も法も辨へぬといふ物、其方が思ひ初たは、かうした事を知らぬ昔、所詮無い縁とあきらめて、さつぱりと思ひ切つて」清姫「イヤ成ませぬ」母「サア其ならぬ所を」清姫「コレはしたり、同事をくどくと、そして何ぢやの、恐敬へ、兄様の爲にこそ御主人で有らうけれ、私は終に奉公せねば、お主でも杭でもない。まして戀路に高い低いの隔があらうか、高位皇妃の姫宮でも、大事の男を添せはせぬ、思ひ切る事如何ならぬ」母「コレハ扱爰な子よ、能加減に情張れ、是非々々ならぬと云ひ募れば、姫君も女子の意地、よもや負けては、ござるまい、時には安珍様の御難儀、コリヤ新左衛門が強い目に遭はずぞよ。とはいへ思ひ込だ殿御、此儘に打捨て残多いも尤も、よい／＼母が思案が有る。姫君に事諱いうて、安珍様と契約の通り、夫婦の盃取かはさせ、其上で思ひきらそ。暫く待や」と立て行く。障子押明け新左衛門、つよと出で、新左ならぬ／＼、母の詞が甘ければ、附上つて様々の存外、主人に恨有る女、不時の災有まじき物でなし。只今よりきつと改め、御兩所の傍近く参る事堅うならぬぞ。コレサ母人何をくどく。ソレ引立て部屋へござれさ」清姫「イヤ是兄様、いかに妹なれば連云たいがいなそりや慘い、男の傍へ女房が行くに、怖い事も何にもない、さう胸慾に出さしやんすお前方を相手

にやせぬ。微塵も構つて貰まい、此上は安珍様に直々、錦の前と此清姫、何方が女房に成か成ぬかたつた今譯立てる。其處退かしやんせ」と断込むを、母は悲しく取籠り、「ア、疎ましや」と制すれども、生付たる嫉妬の萌、突退け跳除け駈行くを、飛かよつて新左衛門、がんづか攔で引戻し、閨の戸明けて打込めば、聞えぬくと又駈出づるを止むる母親諸共に、突遣り押込み新左衛門、戸をはたと鎖し樞下せば、一間の内より錦の前、安珍伴ひ走出で、錦の煎今の様子を聞かすに、能々思ひ詰た清姫、心根もいぢらしと、添て進せて下さんせ。自は是迄」と守刀を取出し、既に自害と見えければ、安珍驚き押し止め、安珍「それは一興、清姫が志無下にもならねど、其方が死では我のみならず、父百川が言譯たよす、兩人共に見捨ぬ思案は某が胸に有り、恨妬は日頃に似合ぬ未練々々」と制し給へば、錦の煎「イヤなう恨妬で死るではなけれども、自は皇子より詮議つよく、行く先々を捜さるればたとへ何處に忍ぶ共、中々思ふ様に添ふ事は成まいと、得心して生害」放して死せて下さんせ」と、取附給ふを新左衛門、引分けて刀腕取り、新左衛門切な姫君過有りては某が忠義が立ぬ。お身の上に恙なく、是非彼方へ添せまする仕様模様は追ての事、先さし當つて皇子方の詮議強ければ心ならず、幸道成寺の住僧は、御父道成入道教海公の御弟子なれば、御兩所に是へお出で、暫く御忍び行へし去ながら、いかに所縁あれば逆

女中を寺に忍せ置く事、氣毒に思されんも計れず、先安珍様御一人、先だつて御立越し、仔細を語り御頼み有り、苦しからずば早速おしらせ有るべし」と、氣をいら立れど安珍は、進もやらぬ後髪引別行く憂思ひ、さし俯向いてましますれば、又縋り寄る錦の前、聞分なしと新左衛門引放して安珍の、鬪擲んで突飛せば、すつくと立つて、安珍「コリヤ何とする」新左「何ととは未練千萬、姫君は此新左衛門が預つた。氣遣せずと道成寺へ疾ととござれさ」おつと心得徒歩跣足、日脚も早き暮紛れ、急ぎてこそは。

清姫日高川之段

行空の道もあやなき懸路の闇、安珍立退給ふと聞き、はつと驚く清姫が、胸も張裂く暎志の炎、焦れ焦ると我思ひ、心強くも偽りて、捨行く夫の面憎や、何處迄もおつかけて、恨を言はで置うかと、寢所を忍び立出づる。姿しどなき振袖の、裏吹かへす夜嵐も、身にしむ野邊の霜深き、草踏分けて只獨、呼ど叫べど其人の、影も形も鳴く蟲の、聲も恨めしちりりんく、蝨は我戀を、思ひきれとの辻占か、うるさや厭やと聞捨て、走り躓く小石原、小笹萱原打過ぎて、天田堤にさしかよれば、向ふへちよこく小挑灯、提けた男の急ぎ足、間近くなれば聲をかけ、清姫「コ

レ申し物問ましよ、廿許の山伏姿、器量の好いが先へ行かずや。お逢なされはせなんだか」と、問はれて、男「成程逢うたく。それは餘程跡の事、宵闇で道筋が知れにくい、道成寺へは斯う行くか、と問うた顔付うちくきよろく、それを尋ぬるこなたの素振、エ、聞えた、コリヤ色ぢやのく、しかも荅の花の色、移にけりな徒も、添ふに添はれぬ事が有つて、一思ひに死んでしまひ、未來で添はうと思はしやろが、ソリヤ大な無分別、是迄其手が幾もあれど、先で逢ふやら逢はぬやら、どうやらかうやら便りが無い。殊に彼山伏殿には、たんと道が」清姫「おくれたか」男「おくれた段か、なんほ急いても女子の足、追つく間にや夜が明る。引返して去んだがよかる、去なうやれ、我古里へ歸ろやれ、我れも宿へ歸らん」と、足も取次に行過ぐる。「ハアア遅れたり口惜しや、いで追つかん」と氣をいらち、小袂引上げ帯引締め、駈出す先はせいくと、一村しける藪疊、右手の田の面に打續く、井路の懸橋、さよやきの、橋も恨めし何時の世に、誰が忍びあふ薄の岡、跡に見捨てよ行先へ、狀箱かたけた早飛脚、行きあたつて「あいたしこ、鼻柱がくわんと云うた。コレ目を明て通りやいの」と、叱ちらして行過ぐるを、清姫「コレコレ待つて」と引留め、清姫「ちと尋ねたい事が有る。二十許な山伏の」飛脚「チット皆迄聞くに及ばぬ、たつた今跡で逢うたが、其山伏の咄には」清姫「どう云うたえ」飛脚「鼻柱がくわんという

た」清姫「ハテぢやら〜と戯談云はずと有様いうて下さんせ」飛脚「サア有様は定めて此方の事
である。十六七な娘が見えたら、おれに逢うたこと、いうてくれなと頼みやつての」清姫「サア
其跡は」飛脚「イヤそれ云うて居る隙がない」清姫「無うても行つても問はにやならぬ、譯聞いて追
付きたい。サア〜ちやつと行きたいわいの」飛脚「イヤ其方より此方が行きたい、急用ぢや其
處退いた」清姫「イヤ〜聞ねば通さぬ〜」飛脚「ハテ扱邪魔なわろに出合た、時が切れうか知ら
ねども、かい摘んで話さざ成るまい。ハテ高が此方をほつと飽て、夜抜けするというたわいの」
清姫「さうして如何ぢやへ」飛脚「さつてもくどし問殺すは、コレ是から跡は大事の咄、熟乎と云
はねばならぬ。ドレ耳爰へ持てござれ」清姫「其跡はへ」飛脚「耳つ遠、憚りする間に摺抜けて、飛ぶ
が如くに急行く。清姫「赫つと急上し、「扱こそ我を出しぬいて、錦の前にそはん爲、逃隠るゝは
汚し憎し、命限り根限り、追驅け追詰め、今に思ひしらせん」と急げば、せゝ程足本は習はぬ道
に疲るゝを、踏しめ〜行先に、鉦打鳴しひよつこ〜、無縁法界七墓を、毎夜さ廻る修行者
が、行違ひさま、清姫「コレ申しちと頼みたい事が有る」と、聲かけられてわつと飛退き。修行者「ア
ア寄るまい〜。どうやら今夜は氣塞なと思うたが、案の定出た程にの」清姫「ハアテ苦しうな
い物ぢやわいの」修行者「其方がなうても此方がくるしい。坊主を見かけて頼みたいと云やるは、

家札を捲つてくれで有らうが、此邊に家は一軒もない、近頃龜相千萬な。そして見ればびらしやらと、色よい著物、コレ惣體幽靈といふ者は、白無垢著て出る物ぢやわいの、いとしや其様な迂濶者では、極樂淨土の道も知るまい。ドリヤ迷はぬ様お念佛で、十萬億土へやつてくりよ。なまいだくくく」清姫「ア、是々そんな者ぢやないわいの。私は先へ往た人に、追著かねばならぬ者、何處元で逢しやんした。それが聞きたい、ちやつとく」修行者「ハレ又滅相な事ばかり、形恰好も云はいで、エ、合點々々。そりや跡の松原で逢つた、山伏の事である。コレ其わろが云うたはの、若い女子が此道を來るならば、俺は川へ身を投けて、死んだと云うて騙してくれ。逢うては強う難儀する。どうぞ跡へ戻してくれと、頼みやつたれど此坊主、嘘ついては未來が怖さに、眞直に言ふぞや。ア、是々其氣相は何事。ナウ怖や恐しや、おらが知つたる事ぢやない知らぬが佛、南無阿彌陀赦し給へお女郎、助給へ御誓願。なまいだく南無阿彌陀」ぶつ共這々遊足は、行方知らず成りにけり。「なう是それが眞かいの。エ、腹立や胸苦しや、それ程いやな自を、女房に持たうと何故云うた、男婿城人でなし恨しや妬しや。嘴付ぞ取付くぞ」と、怒る顔朱を注ぐ、色も嫉妬に迷の煙、眩む眼に涙の雨、ばらくばつと、裾を蹴はらし砂を飛ばし、駈け行く道も心から、果しも流の音凄き、日高川の渡し場に、漸辿り著けるが早月代もさしの

ほり、隈なく見ゆる向ふの岸、小舟もようて舟長が、笠傾けて眠居る。嬉しや此川越え行けば、道成寺へは一足と、聲をはかりに、禪懸「ナウ〜其舟渡してたべ。早う〜」と呼ばれば、寐耳に獨り舟長が、目を摺りこする佛頂頰、舟長あた喧しい何ぢやいの。早う〜と仰山さうに、たつた櫓の舟賃取るとて、彼方此方と舟廻しては肩も堪らず。第一ねむたい、夜が明けたら渡してやる。エ、うまい最中を、けたよましう起された、あた歩が悪い」と呟けば、禪懸「イヤなう夜明の事は置いて、一寸間も待たれぬ急用、道成寺迄早う行きたい。情ぢや何卒渡して下され」舟長「何ぢや道成寺へ行くと言やれば、宵に渡した山伏の、跡追うてきた女子ぢやな。それなれば猶ならぬ。彼山伏の頼には、様子有つて某は道成寺へ廻行く者、十六七な女が來らば、必ず舟を渡してくれな、逢うては忽ち命づくにも及ぶ事、若し渡さば、其方共に難儀せう。くれぐれ頼むと云やつたりや、何時迄も渡しやせぬならぬ〜」と冷酷なり。禪懸「コレなうそれは胸慾ぢや、たとへ渡して下さつても、此方に科も難儀もかけまい。思ふ男を人に寝取られ、私には行ねば焦れ死、捨る命は惜まねども、たつた一言恨がいひたい。つらい悲しい身の上を、不便と思ひ其舟に、載せて下され渡してたべ。慈悲ぢや情ぢや功德ぢやはいの、是ぢや〜」と手を合せ、拜つ侘つ身を悶え泣きさけぶこそ道理なる。舟長「ハテあつた執拗いとうばり女郎、

叶はぬ事をぐづかばと、とこ吠たり喋つたり、息筋張るので寢られぬわい。足本の明い内とつ
 とと去ないでな、但し渡さにや死ぬる氣か、俺此れ迄、焦れ死といふ者終に見た事がない。さ
 らは寢ながら見物せうか」と、舟梁に脚踏ん反し苦口いふも川向ひ、喧嘩じかけと見えにける。
 今は詮方泣く目をはらひ、清嶋ヲ、渡さぬ逆爰迄來て、やみくと歸らうか、恨言はずに濟さ
 うか。此水底に沈まば沈め死なば死ね、念力通さで置くべきか。百尋千尋も何の物かは、渡つ
 て見せん」と身繕ひ、川へさんぶと飛込んで、逆巻く浪をかき分け、左手に沈み右手に浮き、
 拔手を切つてさつくさ、さつと飛びちる水煙、雲をさそへる蛟龍の、巨海を渡るごとくにて、
 跳ね立て、蹴立てと泳しが、瞋恚の猛火五體を焦し、口より吐く息炎々たる、炎を吹きかけ目を
 瞋らし、髮逆に振亂し、一念凝つたる勢に、舟長胸りわなよき聲、舟長ヤレ恐しや冷じや、
 鬼に成つた蛇に成つた。そりやもう來るはヤレ上るは、喰殺されては成るまい」と、舟を乗捨
 て駈上り、堤の原を横切に、命からぐく逃けて行く。清姫は一筋の、瞋恚強勢弛まず去らず、難
 なく岸根に泳ぎ付き、照る月顔を水鏡、見れば額に角生立ち、髪も形も我ながら、冷じや恐し
 やと、しばし忙れて立つたりしが、「もう此姿に成るからは、逆も連添ふ望は絶えた。我添はぬか
 ら人も厭、錦の前にのめくと、何の添はせう寢させうぞ。可愛さ餘つて憎さが百倍、取殺さい

で置かうか」と、又駈出す草履塚、松原過ぎて行先は、間近く見ゆる森林、棟門高堀白々と、蔓竝べし道成寺、嬉しや爰ぞと走付き、門の戸險しく打叩けど、答も風の音ばかり、寺内ひつそと靜つたり。清姫「ム、扱こそく、我追來る事疾く知つて、人を隠ひ置くからは、明けぬ筈通さぬ筈、こは何として入るべきぞ。ホウ究竟の事こそあれ、是よく」と門前の、一木の松に葛蔓、取るより早く飛上り、梢遙に傳ひ行く。裳裾は自然と蛇形の尾先、頭は憤怒の鬼女にひとしく、角をふり立て齒を鳴し、鱗を逆立てくるくく、枝を巻立て巻登り、堀を打越し眞逆様、どうど落つると見えけるが、寺中俄に震動し、鐘樓の撞鐘鳴りわたり、響渡れる有様は、百千の雷も一度に落來るごとくにて、凄じなんども愚なり。わつと戰慄く同宿共、門の戸開き飛んで出で、同宿共「ナウ怖や恐しや、安珍様のお頼故、鐘の中へ隠したりや、清姫が追うて來て忽ち蛇身に成るや否、鐘を纏うて熱鐵にし、いとしなけに安珍様を、蒸殺にし居つた。サア、おぢや地頭へ此様子注進せう」と裾端折り、かけ出す空も曉の、鳥のなく音や鐘の聲、跡に響くも三重魂呼び、閨の中より清姫は、魔怯え走出で、邊見廻しうろくきよろく、額を撫つ身をさすり、茫然として立ちたりしが、心づく程怖しさ、「扱は今のは夢で有つたか」ハアはつと計に伏轉び、泣くより外の事ぞなき。虬共興醒め顔、絛共ソレ見やの白菊、先にからふ

んすんとお聲が高いは、魔まれなさるゝ物である。起おこしませうと云うたれば、イヤありや甘い夢見みなさるのぢや。其儘そのまゝおけと猪口ちゆうこう才さいばかり、ヲ、おいとしほや、能々よくよく怖い夢ゆめので有つたか。此お汗あせの出した事ことわい、幸さいお薬いやくも煎せん上げた、一口ひとくち上あがつてお心を鎮しづめなされ。夢は五臟ごわさうの業わざと申して、氣きの草臥くたびれで恐おそしい事も見る物、それを咄はなすが懺悔ざんげとやら、又逆夢さかゆめとて好い事も有る物、マアどんな夢御覽ごらんうじた、ちよつとお聞きかしなされませ。サアくどうぢやと」口々に、問まへど答こたへもない噓うそ、「それが何のむづかる事、お氣きの弱よわい」と、とりぐに、諫いさめつ賺ずかしつ氣きの毒どくさ、背撫せななでさする計はかりなり。折柄せりあひ表おもてに下部しもへが聲、「他戸わうじの皇子みこの雜掌ざつしやう、鷲塚じゆづか彈だん正殿せいでん御出ごいでなり」と呼よはれば、「それまあ姫君ひめぎみお部屋へやへやりましや。お袋ふくろ様さまへ使者しやの様子ようす申上まをけん」と立騒たちさわぎ、皆々みな奥おくへ入りにける。程ほどなく立入たちいる鷲塚じゆづか彈だん正國せいくに秀ひで、底意そこい地ぢ悪わるき面辯つらむせも、主あるじの威光ゐくわうをはな袴はかま、肩肘かたひぢい怒いからしのつさのつさ、對客たいきゃくの間まへ打通うちとほり、上座じやうざに就つけば母ははは立出たちいで手をつかへ、母はは先ま以もて遠路えんろの所御苦勞ごくろう千萬せんばん、何事なにごとかは存ぞんねども、お使者ししやとあれば、躬まご新左衛門しんざゑもんが承うる筈はずなれども、用事もち有あつて今朝けさより他た行いいたす、苦くるしからぬ事ことならば、憚はばながら此母こゝろへ仰置おほせおかれて下くださりませ」鷲塚じゆづか「ヲ、同姓どうせいの老母らうぼへ申渡まをすは、新左衛門しんざゑもんも同然どうぜん、よく聞きかれよ、使者ししやの趣餘おもひまよの儀ぎにあらず、定さだめて聞ききも及およばれん、主君しゆぎみ他戸わうじの皇子みこ御尋ごたづねの錦にしんの前まへ、安珍あんぢん諸共しよども此家こゝに隠かくひ置おかれし由よし、言語ごんご同斷どうだん不屆ふききなれども、

其儀は御容赦、急ぎ兩人の首打て渡さるべしとの仰、イヤサ驚き召れな、委細は齒醫者元隆が
 身が旅宿へ注進通はない。陳し立召さると踏込んで家搜、サア目通りへ引出し召され。ヤア家
 來共首桶持て、早くくと迫立て、退引させぬ歪み頬、はつと思へどさあらぬ體、母仰の
 通り安珍殿は、昨日ちよと立寄られしが、熊野權現へ參詣するとして、此家は直様出られました
 りや、それから先は存せぬ事、又錦の前様とやらは、此母にも深く隠し、躬新左衛門が隠ひ置き
 たれば、留守の内に首打つて渡す事「驚駭」ならぬといふのか」母「イヤ左様ではござりませぬが、
 私は何にも様子を存ぜず、姫君には、何の科で首打てと仰るな」驚駭「ハテそりや知れた事さ、今一
 天四海を掌握有る他戸の皇子、色好を能知つて御心に隨へんと、諸國の人民我一に美女を選つて
 さし上ぐれば、御所はもやくおし合ひへし合ひ、女が集んで爪もたよぬ。其大勢の美女をさし
 置きうつ惚給ふ錦の前、有難しと尻もつ立てあつちから拜購する筈、安珍と腐れ合ひつと走る
 徒者、首切るは理の當然、新左衛門は留守で有らうが、紙子著て川へ打投められうがそりや構
 はぬ。今打放すきりく出しやれさ」母「ハア、それでさらりと様子が知れた、高いも低いも男
 が女に嫌れては、一分たよねばお腹立は御尤、そんなら是非に彼方の首を」驚駭「たつた今ころ
 りと云はす」母「ホウそれもお使者の役なれば御尤、去ながら、親子の中でも遠慮も有り義理も有

り、留守の間にころりはあんまり爲たいがいなと、此母を恨ませう、願はくは直々に仰渡され、如何様共お心任と申します内にも歸りませう、御苦勞ながら今暫、何卒お待ち下さるべし」と、餘儀なき、詞に眉をしはめ、鶯鷲「ハテどう云へば斯う云ふと面倒い困つた物、尺寸の間も猶豫ならぬ、主命なれども爰は身が了簡、高が首さへ受取れば御前は濟む、エイハ新左衛門がお歸りやる迄待つてくれう」母「ハア、是は近頃忝ひ御了簡、然らば一間へ、ソレ女子共御案内申せ、御家來衆後程迎ひに、コリヤ白菊、お使者が退屈なされぬ様、お氣晴に酒一つ、随分と御馳走申してくれ」鶯鷲「何さく、酒所望にない馳走いらぬ、それ共に兩人が首今討放さば、それを肴に一盃吞う、女郎どもどしめかずと案内せい」と睨み散して入りにける。時も移さず立歸る新左衛門尉俊綱、常に替りし屈託顔、諸手を組んで眉に皺、母も心を揉む最中、母「よい所へ戻りやつた、今皇子の使者として、鶯塚彈正が来ていふには、錦の前安珍兩人共に此家に居る事、元隆の注進、首打て出せと有るゆゑ、安珍は熊野權現へ參詣と言譯立て共、姫君はどうも遷す、新左衛門が歸る迄暫くお控へ下されと、一寸遁に云延し、一と間に待たせ置いたり。どうぞお命助けまする分別は有るまいか」と、氣をいら立つれば、新左「さこそく、隠すより顯るとはなしと、姫君是にまします事、元隆が注進せず共、草を分つて詮議すれば、洩聞えん事疾より察し、たとひ

乞食非人でも、似合しき者あらば、代りを立て、御命を救はんものと、日々に心懸れども、只今に至るまで、左様の者も出合はぬは、御運の極め是非もなし、痛はしくは存すれども、御首打つて驚塚へ」母「イヤ是急きやんな、早まるまい。此瀬戸際に身代とまで思ひ付きながら、御首を渡さんとは、日頃に似合はぬ粗忽々々」新左「とは又何故な」母「ハテ身代があるわいの」新左「シテそりや何處に」母「イヤ外でもない、娘清姫」新左「譯もない事、尤彼が面體よく似たれば、某も疾に心付きながら、討つ事ならぬ仔細は、此新左衛門は先腹の子、妹清姫はお前の實子、一腹ならぬ兄ゆゑに、情なくも手にかけてしと、未來永々恨まん事不便なれば、此儀に於てはなりませぬ」母「イヤそりや以ては同じ事、幸ひな身代有りながら、實子の命惜んで、なさぬ中の兄が忠義を立てさせぬと、世間の人に云はれては、此母が立たぬ。それはともあれ、現在實の親が指圖して首討すに、娘が其方を何の恨まう、隙取つては爲にならぬ、ドレ清姫を呼出さう」と、立つを引止め、新左「コレ母人、どうあつてもそりやなるまい」「イヤく、是非に」と争ふ所へ、間近く聞ゆる鍔音刃音、こは何事と騒ぐ内、錦の前と清姫が、雙方薄手負ひながら、打合ひ切合ひ切結び、追つ捲つ驅出づれば、はつと二人が中に入り、押分け新左衛門、清姫をはつたと睨付け、新左「エ、エ憎くい女郎め、此兄が心を碎く始終の様子を知りながら、數度の意見を用ひず、儕

が望を叶へんと、我儘働くのみならず、大切なる姫君に、かすり手負ふせる天罰知らず、もう
 義理も情もない、生置いては主人の妨げ、打放さん」と、手を懸くる柄に取付き「母待つたく、
 全く此母が娘を庇ひ、止るではない、たつた一言いふ事あり」と押鎮め、母コリヤやい娘、今
 も今、親子の義理つく、諍ふも皆忠義、其中で此様な大それた事仕出し、母が顔まで、好う汚
 すなあ。ほんにく姫君は、元より新右衛門の手前も面目ない、昨日の様子を見るからに、如何
 なる過あらうかと、此母が胸は板、手も口もだるい程、意見折檻色品かへても聞入れず、執
 著深い心から、此恥さらし業さらし、どうした因果な生性、憎うてく何と云はう様がない。コ
 リヤとても助け置かれぬ命、今兄の手にかゝるとも、せめて一言御赦されて下されませと、姫
 君にお侘を申し、潔う死んでくれ、是程の事辨へぬは、鳥獸にも劣つた根性、エツエ浅ま
 しや悲しや」と、口説き歎けば清姫は、顔ふりあけて、稱姫、ナウ母様、お腹立ちも憎しみも、重
 重尤去りながら、全く錦の前様を恨妬で手は負はせぬ。最前からお前方の切ない諍ひ、陰な
 がら聞く悲しさ、血を分けた兄弟なれば、何程お勧めなされても、兄様が義理を立て、とても
 身代に立て給はじ、何とぞ錦の前様のお命に代つて死なんものと、態と戀の意趣に取りなし、無
 體を云ひかけ抜刀、此方から先に打廻れば、姫君もこらへかね、切付け給ふを受けつ流しつ、戦

ふ振も皆手段、殊に我身をさし付けて、切らるゝ覺悟でせし事ぞや。心ばかりははやれども、かよわき女の刀業、一思ひに切れはせて、却てあなたに手を負せた、勿體なき恐しさ、今更悔むに其甲斐なし。とは云へ今まで安珍様を戀ひこがれた我なれば、是も誠とし給ふまじ、死んだ跡での言譯と、認めおきし此書置、見て疑を晴してたべ」と、懐より取出す一通、母は取上げ押開き、母コレく、姫君、新左衛門も見てたもれ、今の詞に違はない、それでこそ我子なれ、出来したくけなけ者」と、さし寄つて撫さすり、褒美の詞も心は不便さ、目にもる涙おし包み、笑顔つくれば錦の前、錦の眞、其心とは知らずして、非道の刃にむざくと、切らるゝ事の口惜さに、あしらふ刀もならはぬ業、ついでがそれで此様な、むごたらしい事してのけた、こらへても、赦したも。如何した縁かかほどまで、揃ひも揃ふ親子の忠節、身代と立てるも自ゆゑ、先だつてもいふ通り、皇子方の詮議強ければ、とても遁れぬ我が命、今手にかけて使者へ渡し、清姫を助けてたも、頼むく」と手を合せ、首さしのべて、待ち給へば、新左衛門押退けて、聲あらよけ、新左「ヤア聞分なし姫君、妹が健氣の言譯、得心で立つ御身代無下になさるゝは、ソリヤお情ない。何事も我々次第に打任せ、サア構はずと一間へござれさ」錦の眞「イヤなんほでも清姫は、殺さす事ならぬく」新左「是はどうした御合點」と、制する内に清姫が、

刀逆手に取直し、吭の鎖を搔切れば、覺悟しながら新左衛門、母も驚きうろく涙、錦の前は猶悲しく、錦の前其方を殺すまい爲に、兎や角いふを聞きながら、早まつた事仕やつた。情なや悲しや」と、縋り付いて泣き給へば、清姫くるしき息をつぎ、清姫お志は嬉しいが、私はお前の身に、今たよすともどうで死なねばならぬ譯、恥しながら聞いてたべ、宿世如何なる因果にや、安珍様を思ひそめ、身も世もあられず、戀ひこがるよ心から、今朝曉見た夢に、我身を捨置き、お前にそはんと、逆行く男の恨めしく、生ながら蛇身となり、道成寺へ追駈け行き、鐘を纏うて炎に焦し、安珍様を取殺したと見たはまざく、正夢の、覺て悲しさ恐しさ、我身ながら愛憎が盡き、直に髪切り、菩提の道に入る合點それともに、迷ひ安きは人心、たとひ姿を墨に染めても、安珍様の顔を見れば、忽ち瞋恚の角も生え、身中は鱗炎を吐き、苦患に苦患を積むは必定、生ながら畜生道、地獄の種を蒔ん悲しさ、今本心になりし時、早う冥土へ旅立つて、此世の業を果さんと、思ふ折節お身がはり、お役に立つて死ぬると思へばせめても本望、私はなんほう嬉しいぞや。とに角此身は先生より、廻る因果に責められて、恨に恨、仇に仇、數も限らぬ罪科を、背負て歸る未來の闇、不便と思ひ何事も、御赦されて下さりませ、安珍様へも此通り、お傳へなされて何時までも、仲好う添うて下さりませ。云置く事も是ばかり、もう目も見えず、

耳も聞えぬ、お別れ申す姫君様、兄様母様もうさらば、南無阿彌陀佛、彌陀佛の、聲も此世の名残の霜、消えて果敢なくなりけり。ハア〜はつと錦の前正體涙にくれ給へば、母も堪へかね聲を上げ、母「禍徳に勝たずといふに、家に傳はる雷鳴丸、守となる劔が無きゆゑ、大事が出来、ふと案じたも斯うした憂目を見やう端、いかなる悪事災難も、此母が身にかよりはせて、末頼ある娘に祟り、非業の死をすと思へば、一倍可愛さいぢらしさ、義理も恥辱も忍ばれぬ悲しうござる」と縁言も、甲斐なき死骸に抱き付き、前後不覺に取亂す、俱に不便さ新左衛門、目に持つ涙打拂ひ、新左「コレ〜母人未練々々、隙取て驚塚に、氣取れては一大事、奥へ心を付けられよ」と、引のけ押退け妹が首、はつしと切れば母親は泣く〜一間をさし覗き、母「コレ氣遣ない、急きやるなく、使者は酒に酔臥して、前後も知らぬ高厨」新左「マそれは重疊、よい首尾」と、首取をさむる時こそあれ、土砂踏み散し駈來る安珍、縁先にすたく息、安珍「某夜前此家を出で、道成寺へ赴きしを、嫉妬深き清姫、捨置き逝ると心得しか跡を慕うて追駈くる、形は眼前大蛇となり、我が隠れたる鐘を巻き既に焼死ぬべき處、日比信する熊野権現の御名を唱へしかば、不思議に命助かりしと、思へば忽ち夢さめしが、果して鐘は鐘樓よりおちて熱鐵となり、いまだほとほり冷めず、訝きは清姫、身の上恙なかりしか、心元なし、様

子はいかに」と、色をかへて語らるれば、人々奇異の思ひをなし、割符を合す夢物語、敢なき
最期の次第まで、語るも涙聞く涙、安珍大きに仰天あり、安珍「ナニ清姫は死したるとや、扱こ
そ胸にこたへし變怪、恨妬も一筋に、思ひ込んだる眞實心、はかなき縁とも知らずして、一
生我を戀ひこがれ、苦に苦みを重るのみか、錦の前が代りに立ち、命を捨てる心根を思ひやる
さへいぢらしや。今一足早からば、せめて末期に詞も交し、心よう往生させんに、不便の者の
身の果や」と、人目も恥ず聲を上げ、歎き沈ませ給ふにぞ、猶も涙は止め得ぬ、姫君母も諸共に、
又咽かへるばかりなり。新左衛門はつと心付き「マア泣いて居る所でなし、御兩所の首受取らん
と、一間に控へし鷲塚に、見付られては叶ふまじ、安珍様には姫君を伴つて、疾く何方へも落
ち給へ、早く」と氣を苛てば、心得たりと身繕ひ「サア姫おぢや」と手を取つて、既に出
でんとし給ふ處へ、襖蹴放し駈出る鷲塚彈止、飛かよつて安珍姫君、兩手に攔んでぐつと引寄
せ、鷲塚馬鹿つくすな新左衛門、呑まぬ酒に酔うた面して窺つたは、甘い方便を見やう爲、身替
り古い質物喰ぬ、サア我目通で此兩人、首打て渡せばよし、厭といふと鷲塚が、攔控に雜作はな
い、返答せい新左衛門、なんと」と、憎ざうなる面魂は天の邪鬼、多門天の加護ならで
通れんべうは見えざりけり。新至「案外なり鷲塚、愚者に向つて此新左衛門、まだ」と返答な

い、斯く顯るよ上は破かぶれ、天地は覆くり返るとも、御兩所を渡さうか、いらざる無駄骨折らんより、素手振つて疾と歸れさ、意地張ると首が飛ぞ」驚塚「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、此驚塚が首骨は金輪際より牛拔し鐵石同前、汝如きの刀が立うか」新左「チ、立つかたよぬか、覺の刀受けて見よ」とすばと抜き、打かくれば、まつかせと、兩手に搦し二人を突出で、「サア左が所望か右から切るか、ヤレうて、ソレきれサア」と、劍の下にさし付ける。二人の心は消入るばかり、母も傍から、アレあぶく、さしもに猛き新左衛門、人質にあぐみはて、進みもやらすうろくと、詮方盡て見えたる所に、思ひがけなき大橋元隆、忍び入りたる床の下、聲はね上げ飛で出で、元隆「ホ、出来されたり驚塚、貴殿仰を承はり、此家へ向はるといへども、若二心もあらんかと、忍びて様子を窺ひしに、天晴々々驚き入つたる忠心、早く二人の首討れよ、妨する新左衛門は某が受取た、眞一ツにしてこます」と、切付るを、はつしと受け、二打三打闘ううち、驚塚すかさず後より、すらりとぬいて元隆が、肩腰かけて大袈裟切ばらりすと打放せば、人々はと二度悔り、驚塚「ヤア騒ぐまい」と熊びすさつて兩手をつき、驚塚「某元來濱成が盼なれば、御兩所ともに疎略に致さう様はなし、其上先年蹴鞠御會の節酒狂によつて傍輩を過ち切腹に極りしを、姫君の御父道成公の御憐愍をもつて命助りし御恩、片時も忘るよ事なく、

道ならぬ皇子に仕へ、數度の諫言用ひなければ、折をもつて身退かんと存する折柄、御兩所の首受取との役目は幸、何とぞお命助けんと思慮を廻らす所に、此元隆が忍び居る事、最前熟と見付し故態と無情く計ふたり、此上は少も御氣遣あるまじ、御兩所の身替は某が受取て主人の手前首尾能せん」と、忽天地と立替る鷲塚忠心に、二かたの御悦び、新左衛門も安堵の思ひ、新左衛門先は祝著さりながら、妹が首を姫君のかはりに立るは似寄し事、安珍様の身替には何れをもつて」鷲塚「ハテそりや此元隆が首さ」新左「イヤく」是は雪と墨、似ても似付かぬ面體」鷲塚「サア其似付ぬ首をもつて、身替に立様は、まづ此通り」と首搔落し傍に沸れる藥鍋「おつ取て打かくれば、忽ち熱湯せんりうと、濺ぎ爛れてあやめもなき首さし出して、鷲塚「コレ見られたか、此安珍は清姫が所爲によつて、道成寺の鐘の中にて焼爛れしと、ナ眞直に申上ぐれば御前は濟む、元より蛇身と成つたる清姫、雲に跨り失せれば顔も形もない筈、ナ合點か、といふが大事の方便、國々末世末代まで清姫は、現在大蛇と成つて安珍を取殺したと、世上へ廣く沙汰するやう、披露あるが肝要、御兩所は山城の國葛野郡にまします、親王の御方へ急ぎ落させ給へと、教はせぬ勝手に召れ。ナニ老母新左衛門、コレサ何をうろく、久し振で不時の對面祝著々々、縁あらば重て逢ふ罷歸る。ござらうか、さらばく」と首桶携へしづく」と、立

いづる情の祓はなまなかに、云はぬが云ふにましくる恩愛、娘よ我子と昨夜まで、呼れし姿も
暁は、きえて行方もなき魂を、こがるよも夢迷ふも夢、夢と見するも後の世に、夢といふ
べき言の葉も、なくく別れ行く空も、心もくれてさめぐと、降は涙か村雨か、濡れぬ袂は
なかりけり。

第五

鐘は一魚千頭の苦身一聽鐘聲の所に離れ、永く菩提の因種を成すとかや。往昔右大臣橘道成
卿の御建立、紀州日高の道成寺清姫が所爲によつて、久しく撞鐘退轉せしを、御弟子行海再び
鐘鐺の志願を立て、既に成就してければ、庭に折咲く櫻木を假の鐘樓と鐘をかけ、今日ぞ供養
の道場に老若貴賤の參詣も、女人を堅く制するは、不時の鐘磬を隔の高塀、尊き寺は門からと
實も殊勝に見えにけり。當時他戸の皇子の命によつて、供養の役人熊川立蕃、相役眞子の新左
衛門尉後綱、しづくと入り來れば、住持行海和尚出向ひ、行海先づ以て御兩所ともに御苦勞千
萬絶て久き當寺の撞鐘、信心の輩助力を加へし故、此度あらたに鑄立て愚僧が大願成就いた
せば、いか許り大慶」と挨拶あれば、熊川立蕃、玄董誠に當寺は、文武天皇の勅願所道成の

建立、最上の鐘も有りしを、是なる新左衛門の妹清姫が所爲によつて、熱鐵となし失せられたれば、他力を頼まず新左衛門、自ら寄進召ると筈、しらぬ顔で奉加さするは蟲強い穿鑿」と、例の雑言耳にもかけず新左衛門、新左手前は鐘樓寄進の契約、鐘の奉加は和尚の望一行海、いかにもいかにも愚僧が願望、惣じて鐘鑄と申すは右縁無縁の衆生を勧め、無数の罪障を消滅さする爲なれば、他力を主と致すが法義、在俗の御存なき事。ヤアとかふ申す内午の上刻、鐘供養の時至れり、いでく用意いたさん」と方丈さして三重

今様亂拍子

つくりし罪も消えぬべし、鐘の供養に参らん。是は此國の傍に住む白拍子にて候。扱も道成寺と申す御寺に、鐘の供養の御入り候よし申し候程に、只今参らばやと思ひ候。月はほどなく入り潮のく、煙みちくる小松原、急ぐ心かまだ暮ぬ、日高の寺に著にけり。柳子、いかに申し候、是は此國の傍に、と云うては堅い。定てお前方も聞及んでござんせう。私櫻子といふ白拍子、鐘の供養と聞て拜たさに來たわいな。其處へ通してくれなさんせ」と、いふも媚く姿の花、玄蕃も暫し見とれしが、玄蕃コリヤノ女、此寺は子細有つて、鐘供養の場へ女

人禁制、其處立て早歸れ」と、苦り切つたる我は顔叱り付れば、櫻子「サア其子細は聞及ぶ、清姫の恨残で、又もや仇をなさんかと、恐ての事で有うが、女子も女子によりけり、私隠もない白拍子、胡散な者ぢやないわいな。斯した場につらなれば、五障三従とやら女の罪を遁るとため供養を拜んだ代には、お望み次第何成と、舞てお目にかけてふがな」文華「イヤサ舞謠も見たうない、禁制なれば何時迄も通す事ならぬ、邪魔ひろがば家來に云ひ付け、引ずり出すが歸らぬか」と、きめ付れば新左衛門、新五イヤ先待れよ立蕃殿、すべて佛事に舞樂を以て供養する事、歌舞の菩薩の員數にして、三國傳來是を學べば、斯かる砌に白拍子が来るは幸、殊に櫻子は今様に名を得し事聞及ぶ。苦うない一曲奏でい、それく早う」と勸れば、はつと答も柔かに姿の立木若楓、はでな模様も今様の、扇開いて聲をあけ、櫻子「先青陽の朝には、谷の戸出る鶯の、聲なかりせば雪きえぬ、山里如何に、春を知らまし、絲遊に柳櫻をこきまぜて、都の人の行き交も、花に誘はれ招かれて、思ひくくの晴小袖、伊達とじみとを染分けて數も限らぬ幕の内、音締を高く引く糸の、梅は咲かねど鶯の、折々通ふ心意氣、さうぢやといな、花の盛はちらちらちらちら、散來る我思ひ、眞實さうぢやいな、さうぢやそれかと夕間暮、蚊遣ふすぶる賤家の軒を、ほとく叩く水鶏の鳥、卯の花菖蒲かほよ花、咲いたかく盃の、廻る月日も夏過て、秋

は名にあふ更科や、月にうつらふ萩桔梗、尾花尾車女郎花、影に妻戀ふ小鹿の聲、かいろと鳴くと知らせたや。紫蘭芙蓉の花よりも、紅葉よりも戀しき人は、見たい物ぢや、見えつ見られつ水の面、流の身にはうき事も、又よき事も荒海に、帆かけし舟の風次笛、揉れて我も身をづくし、心づくしの數々を、いはでの森か松原の、葉越に見ゆる鎗印、對のお道具飾り馬、臺笠立傘大鳥毛、行列揃へてほつ立てろ。宿入り下馬先立關先、けんがくはりかけぶつかける、合點か、合點だ、踵をぶん付、願突出し、手先を揃へてすすすのす、振好や見よやな今降つもる雪の暮、峯も尾上もおしなべて、皆白妙やしろくくと、明行くも鐘暮るも鐘、思ひ有る身は聞くとびに、つらやうるさや腹立や、此方にもなり彼方にも、鳴か響くぞアレごんく、鐘に恨は數々ござる、先初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり。後夜の鐘を聞く時は、是牛滅法とひどくなり。晨鐘の響は生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響けども、我は五障の雲晴れて、眞如の月をながめ明さん」眺も盡きせぬ四季の景色、立蕃も思はず聲を上げやつちやく。玄蓋、イヤ何新左殿、最前は胡亂なるかと疑つて叱つたが、紛もない白拍子、櫻子と名を取りし程有つて扇の手の開山、逆もの事に今一曲、面白き事所望々々」櫻子「あら嬉しや涯分舞を舞ひ候べし。嬉しやさらば舞はん」とて、あれにまします宮人の、烏帽子を暫し假に著て、既に拍子をすよめ

けり。「花の外には松ばかりく、暮れ初て鐘や響くらん。道成卿は承り、始めて伽藍桶の、道成興行の寺なればとて、道成寺とは名付たりや山寺のや、春の夕暮きて見れば、入相の鐘に花ぞ散りける、花ぞ散りけるく」謠ひ返し舞ひ返し、祕曲を盡す今様に、一人の役人參詣の、老若貴賤諸共に、暫く興に入りけり。櫻子は人々の油断を窮ひ折よしと、立舞ふ様に狙ひ寄つて、立蕃が鬮只一打と、切付くるを抜かせて丁と受けとめ、立蕃扱こそく、供養を守護する我々に、仇なす女疑ひもなき清姫が怨靈よな。如何なる惡鬼惡龍も、立蕃が刀に切りしたがへ、永く障碍の根を絶たん」と、開いて付込み打合ひ切合ひ、たよかふ内に立蕃が刀、疊みかけて打落され、指添ずばと抜放せば、忽ち鳴出す雷の音、天地も裂くる計なり。膽にこたへ我ながら、南無三寶一大事と、袖に隠しうろつく内、新左衛門立廻り、櫻にかけたる鐘の釣綱切落し、邪魔な女と鐘に入れ、立蕃が鬮取て引伏せ、新左「コリヤ此劔は某が、家に傳はる雷鳴丸、是を所持した俺が本名、林專太夫で有らうがな。眞直に白狀」とひしき付くれば、立蕃成程劔は雷鳴丸、皇子より預り置いた此立蕃を、專太夫とやう名を聞いた事も無い。粗忽して後悔せられな」立蕃「ヤアまだ論争ふは比怯奴、頭上より脚下迄切きざんで白狀させん」と、刀さし付せ違ふ所に、鐘の中より「暫くく待たたく」と聲をかけ、撞鐘擱んでぐつとさし上げ、

顯れ出づる白拍子、女姿を引きかへて、緑の角髪ふり亂し、肌はだに腹はら舂ま小手て脇わき當あ、嶮然きんぜんと立つた
 るは、摩利支天まりしてんの前まえ髮立がみだち、今いま見みるるごとき勢いきほひなり。源げん兼かねヤアく、新しん左さ衛ゑ門もん、其その奴やつ詮せん議ぎに及およばず、
 雷らい鳴めい丸まるを所持しよじゆするからは專せん太たい夫ふに極きはつたり。我われこそ權ごん頭のかみ兼かね政まさが盼がね、同どう名な源げん兼かね連れん、親おやの敵てきを討う
 たん爲な様さま々に身みをやつし、廻まり合あひたる今こん月げつ今こん日にち、貴き殿でんがかすり手て負おせても、某それがしが本ほん望まうなら
 ず、尋じん常じやうに勝かつせん、そこ退のがれよ俊すこ綱づなと鐘かね投な捨てて立た向むかへば、實じつ尤もつとと新しん左さ衛ゑ門もん、腕うで先ま取とつて
 引ひつたれば、遁のがれ所ところと專せん太たい夫ふ、飛と退たいいてつき上あり「推お量りやうに違ちがはず、汝うぬが親おやを手てにかけた林はやし專せん太たい
 夫おとことは我われ事こと、敵かたきで有あらうが仇あたで有あらうが、當たう時じ皇きう子しの家け來らいに對たいし、慮りよくわい外げ働はたらく命いのちしらず、皇きう子し
 は熊くま野の詣まうでを幸さいはひ、親しん王わう方がたの者ものを搦からめん爲な、此この籠かごに御ご在ざい宿しゆく、いでく手て配はい見みせ付つけん」と、合あ圖づの呼よ
 子こを吹ふ立たつれば、森もり蔭かげ樹こゝろ間まに忍しのびし大だい勢せい、拔ひきつれく打うつてかゝる其その隙すきに、逃にげんとうろつ
 く專せん太たい夫ふ、遁のがれさじ遣やらじと新しん左さ衛ゑ門もん、寺じ中ちゆうをさして追おうて行く。源げん兼かね連れん事ことともせず、四し方はうに
 寄よ來くる多た勢せいを相あ手て、ヤア東とう方はうから御ご座ざんせ、南なん方はうにぐんにやりめら、西せい方はうに大だいいかずとも、北きた
 方はう蜻せん蛉りやん蜻せん蜓てんめら、中なに揃あひに大だい小せうえらばず、腦なう鉢はち碎くだいてほんさらば、來こいくと小こ踊おどして、
 當あたるを幸さいはひ人ひと碎くだ、ばらりくと打うつけはね付つけ打うちみしやけば、さしもの大だい勢せい大だい半はん討うたれ、残のこる奴やつ
 原はら足あし腰こしかよへ、皆みな散ち々に逃にげ失しせけり。立けん蕃はんは寺じ中ちゆうを追お廻まされ、度さを失しつて逃にげ出いれば、跡あとに續つい

て新左衛門、「ソレ遁すな」「合點」と、向ふに突立つ源藏兼連、その首擱んでどうどのめらせ踏
付れば、群集の中を押分けかけ分けかけくる苅藻が聲をかけ、苅藻コレコレ葛城源藏様、本望
お遂げなされたら、約束の敵討勝負々々」と立ちかゝる。源藏ヲ、合點、今暫く我から先へ
本望遂げん、専太夫恨の刃受けとれ」と、振上れば新左衛門、新左待つたく、契約なれば討
てば討るゝ筈なれども、源藏が粗忽にて郷右衛門を討たるも此専太夫、儕が命遁れん爲、方々
へ宿替して、家札を残し取違へさする巧、皆是彼がなす業なれば、強ち源藏を敵と討て本意で
なし。郷右衛門を討せし重罪、苅藻が討て叶はぬ敵、ソレよくつて一の太刀、二の太刀は源
藏兩人共に本望遂げた」と、事を分たる一言に、實尤と拔放し、苅藻親郷右衛門を討つたる
敵、思ひ知れ」と切付れば、つゞいて源藏、源藏父權頭を討つたる恨報せん」と、切付け、
二人一所に留の刀、さしも健氣に心地よき。時しも駈來る他力坊、始終を聞いて、他力坊出來た
出來た便なき此苅藻身の片付を頼みたし、此後互に遺恨なきやう、源藏殿の婦妻にせば、親々
の追善是にましたる供養はあらじ、偏に願ふ兼連殿、源藏イヤくそれは互に心好からず、敵
を首尾能く打た上恨はない」と辭退も會釋、新左衛門も立寄つて、是非にくくと手を取りて、
勸むる功德俱々に、結び合する二世の妻、不思議の縁により糸の、長き妹脊と成りにけり。折

節籠に闕の聲、どつと寄來る他戸の皇子、山も崩るゝ大聲にて、皇子、雷鳴丸を奪ひ取り、立蕃を討つたる奴原、一々に引裂かん」と、飛びかゝるを新左衛門、源藏諸共兩方より、むんづと組めば事共せず、「シヤ小賢しき蛆蟲奴等」と、兩手に搦んで引寄せれば、二人も負けじと五臓を揉み、組合ひ捻合ひ根競、しばし勝負もつかざる所に、和氣の藏人かけ來り、思ひがけなく後より、諸足難いで皇子を押伏せ、「勅説なり」と呼はつて、既に斯うよと見えける時、鷲塚彈正駈け來り、鷲塚コレく藏人、悪人とは言ひながら、三公だにも死罪の例なし、況や天孫、劔を當つるは恐れあり、しばらく我に預けよ」といへども聞かず、悪人ならぬく、萬民を苦しむる大罪、助け置いては天下の歎」と、争ふ所へ駈け來る百川、百川ヤレ早まるな暫くく、皇子へかける繩こそあれ」と、神の岩戸の御注連繩、躰に確乎と纏ひ付け、「佐渡の配所へ御移り、鷲塚彈正供せよ」と、引立て申せばさすが又、神の御末の徳有りて、張切もせず打萎れ、引れ出づるも神國の、直なる處に安々と、治り靡く竹の末、豊なる代の例ぞと、世々に傳へて書きしるす。